

わっ！驚いたかな？鶴丸国永(女性)参上！

玖渚真白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話は、鶴丸狂いの狂人審神者（真つ黒本丸所有）が鶴丸呼び出しで、いろんな呪詛やらなんやらをコネコネした結果、鶴丸国永だけど女性で見た目通りの儂い美女（中身の一部は現代の人間。これ、主人公）を作り出し、なんやかんやあつてホワイト本丸に拾われ、勘違いされるお話です。

ぶっちゃけ、続くとおもわないので、見きり発車します。

完結、更新はあまり期待しないでくださいね。

目次

出だしホラーとか	1
真つ黒本丸撲滅部隊参上!	4
真つ黒本丸撲滅部隊参上! (救出目線)	8
真つ黒本丸撲滅部隊参上! (救出目線) 続	12
ひとまず場所を変えましょう	15
手入れをするよ	19
手入れをするらしいです	21
伊達組登場……か?	24
受け入れる	29
自己紹介できるかな	34
自己紹介できるかな (続)	37
新たな仲間?	40
新たな仲間? (続)	45
やっと自己紹介できました	50
白と黒のはじめまして	54
まずは鶴丸とあんたの名前な。	59
鶴丸だからわかること	63
鶴丸だからわかること (続)	68
朝食を食べましょう	72
箱に閉じ込め鍵をする	77
短刀に会いに行く	80
その光景が	85

出だしホラーとか

世の中、よくわからないことが突如自分の身に降りかかるなんてことがある。

ある人は交通事故、ある人は眠ったら、ある人は扉を潜ると…「あなたは死にました！さあ転生しましょう」とか言われるのだろうか。

小説とかマンガとか、アニメとか…まお創作物にも流行り廃りがあるが、いまってそんな感じ？

でも、これは、良くあることなのだろうか…。

(なにこれ、なにこれ、なに、え？え？！)

まさに混乱。

でも、目の前に広がる狂気にS A N値が削られてるのはわかる。

(いきなり真っ黒触手っぽい腕が後ろから何本も羽交い締めしてきて、真っ暗ななかをぐるぐるかき回されて、頭おかしくなりそうっておもって…)

そう、「わたし」はただ歩いてた。

別に人が少ない夜道だったわけでもなく、会社帰りとかで疲れきったみたいなきともなく、ただショッピングを一人で楽しんでただけだった。

ショッピングモールを歩いてたんだ、休日だったし子供連れの親子とか、カップルとかもその辺にいっぱいいた。なのに、いきなり世界が止まった、と思った瞬間後ろから、そう、声が聞こえて…。

(そうだ、みつけたって…)

まるで、おもちゃを見つけたみたいなき軽な声で、ついだとばかり

に、あ、それもいれちやえ…てきな気軽さで。声を聞いてすぐ、真つ黒な手が腕とか腰とか足とかに絡み付いて後ろに引っ張られて…。

どのくらい時間がたったのかわからない。

でも、目をつむっていたことに気がついたから、そうつと目を開けたら、目の前がホラーでした。

真つ暗な和室、血痕が飛び散つてて、なぜか何振りもの折れたり壊れたりしている刀が転がってて、目の前に濁った目をしたひよろつとした男性が立っていた。

「……………」

なにか、ぶつぶつと言葉を発しているが、なぜか聞き取れない。

水の膜におおわれたみたいに音が濁っていて。

そして、ついにその男性と目があつた。

(ヒツ)

こわい。

ギョロつとした真つ黒な目。狂気に渦巻いている目がなめ回すようにこちらをみた。そして嗤う。嗤う。ニンマリしたゾツとするような笑みだった。

「……………!!」

(なに、わからない…だれ、やだ、こわい、こわい！)

恐怖を感じているのに、なぜか身体は動かない。

まだあの黒い腕が巻き付いているのか、ぺたりと座り込んでしまっている状態から身動きひとつできなかつた。

ただ上から眺め回す男性の目がこわい。

ひたすらなにかを叫んで、嗤って、そして…

(え……………)

男性は近くに落ちていた刀を自分の首に向けて、そしてこちらを見つめながら…

「アイシテイル、ツルマル」

切り落とした。

吹き出す血飛沫、黒の世界に拡がるあか。

パチンとシャボン玉が割れたかのように音が戻ったときに囁かれ

た言葉。

それは「わたし」に、鶴丸国永に呪いの言葉を贈って逝った。記憶が混濁する、鶴丸国永とはだれだ？

「わたし」だ。

わたしはだれだ？

「鶴丸国永」に混ざった「わたし」だ。

わたしはなんだ？

彼はだれだ？

ここはなんだ？

あの赤は、なんだ？

どきりと崩れ落ちた彼は、

「わたし」になにをした？

こんなとき、主人公になったものは、状況把握のために動き出すのか。

それとも、気を失うのか。

悲鳴をあげるのか。

わたしはただ、呆然と目の前に広がる惨劇を見ていただけだった。

真つ黒本丸撲滅部隊参上！

どれくらい時間がたったのかわからない。

血の臭いは、もうわからなくなった。

相変わらず身動きは取れないが、頭のなかは少し冷静を取り戻してきた気がする。

こんなホラーな惨劇目の前にして冷静になるなんて、どっかおかしくなった気がするが、まずはやれることからやらなくては。

まず情報整理をしよう。

目の前の分析結果としては、

- ・ 見知らぬ男性（遺体）
 - ・ 和室（暗い）、なぜか男性以外の血が大量に壁やら畳に飛び散っている
 - ・ たくさんの壊れた刀
 - ・ よくみると、柄の部分とか装飾が全て同じみたい
 - ・ 出入り口は正面の襖のみ
- お札と血痕ですごいことになっている
さて、次は自分だ。

・ わたしはだれか？

なぜか「鶴丸国永」という答えが出てくる

・ 記憶が朧気。ウインドウショッピングしてたら

なんかいろいろあって、気づいたらここにいた。

・ なぜか、わたしは刀剣らしい。

あれ、人間だったのにな？

でも刀剣であるという認識がしつくりきてしまった。

・ 人間のときの名前がわからない。

同じく現代での生活知識はあるのに、

自分が何歳でなにをしていたかもわからない。

なんだろう、気を失いたいのを意識はなぜかはっきりしてしまっていて、自分でも引いてしまう。

身体は相変わらず動かない。

いや、首から上、指の先くらいは動くみたいだ。

正面に向けていた顔をうつむかせた時、はらりと肩から滑り落ちてきたのは長い白髪。

座り込んだ胴体は、これまた白い和服を着ているようだ。そこに絡み付くのは黒い腕：ではなく、しめ縄のような太い縄だった。その縄が見事な朱なため、白に線を書いたように赤く彩りを加えていた。

そしてなんと書かれているかわからないお札が、一枚、二枚、三枚…これも赤い字で模様が描かれている。

さて、どうしようかと悩む。声は出せるだろうか。

「……………あー……」

すこし出し辛い。掠れているのか、空気が抜ける感じで大きな声はでなさそうだ。だが、話せなくはない…？

「わ…：たし、だれ、か…：つけほっ」

小さな呟きにしかならない。

これは早々に話すのを妥協したほうが良いか？

他にはなにか出せることがないか…：そんなことを考えていると、物音ひとつしなかつた部屋の外で聞き慣れない音が聞こえた気がした。

金属が擦れるような、きんつとした音。

そのあとにはバタバタとした足音と思われる騒音。

そして、声。誰かがいる。

頭を駆け巡るのは、目の前で死んだ男。

この声に助けを求めて良いのか？

また、あの狂気に触れることにならないか？

わたしは、こわかった。

声はかすかにでも出せるのだから、助けを求めることはできるはずだ。だけど、「わたし」を混ぜた鶴丸国永はなにもせず、静かに目を伏せた。

このまま開かずの間となっても構わない気がした。

時間は静かに過ぎていく。

外の喧騒も静かになった。

どれくらいの時間がたっているかは不明だ。

なぜかこの部屋には外の明かりを感じられるものはなく、自分を中心にうつすらと光を放つ、その灯りのみで成り立っている。

…自分を中心に??

(あれ、わたし光ってる?)

衣服が白いからだけでなく、ほんのりと身体が光を放っていた。そのおかげか、そのせいかは分からないが目の前の状況を把握できたのはこれのお陰だったらしい。

(いつまでこの状況なんだろう)

空腹も睡魔もやって来ず、顔を伏せた状態でぼんやりと畳の目を数えていた。

人は慣れるものだからなのか、それとも刀剣という状態になったからなのかは分からないが、こんな惨劇のなかで嫌悪も感じず、恐怖も薄れてしまうなんて、自分でもどうかしているとか。転がっている刀剣達が鶴丸国永であることに気づいて、なぜそんな状況になってしまっているのか…。

そんなことを考えていたときだった。

正面の襖の向こうに、誰かいることに気づいた。

襖が開かないのか、かたかたと音がなり、しまいにはドンドンと襖を叩く音と声。

「……………う……………??」

まただ。声が籠って聞き取れない。

だが、声の主は一人ではないようだ。

「……………っ……………」

「……………!!」

「……………」

声のトーンは男性と思われる。

もしかしたら、この状況を打破してくれるかもしれない。賭けてみるか…。

「……………だ、れ?」

「!!……………っ!」

聞こえたようだ。襖を必死に開けようとしているみたいだが、なぜ

か微かに揺れるのみでびくともしない。

「ここ、か、ら…だして…」

ひゅつと喉が鳴り、2、3回咳き込んでしまう。

しばらくすると、別の足音が近づいてきた。

そして襖の向こうでなにやら会話をしたあと、こえがした。

「いま助ける！近くにいるなら危ないから離れてくれ」

そう、はつきりとその人の声は聞き取れた。

なぜなのかは分からない。

ここに来てからわからないことばかりだ。

キーーンツと耳鳴りが聞こえたあと、あつさりと襖が開けられた。

伏せた顔をあげて襖の向こうをみる。

そこには目を見開き驚愕の表情を浮かべた、40代程の男性と、太刀や短刀を持った三人の男がいた。

そして、これまた不思議なことにわたしは、一人が審神者で三人は刀剣男士だという知識がふと湧いてきて納得した。

そして、彼らとの間で死に絶えてるわたしを呼び出しまのも、また、審神者であったのだと、このときに気がつくのだった。

真つ黒本丸撲滅部隊参上！（救出目線）

その日、ある本丸に緊急の入電が入った。

どうやらまたやらかした本丸があるようで、元凶の審神者捕獲と、捕らえられている刀剣の救出が今回の依頼だそうだ。

それを読んでいた40代の男性はたばこの煙をため息とともに吐き出しながら、常によっている眉間に、深々とシワを刻んだ。

「…ちっ、またか」

所謂ブラックと表現される本丸への救出依頼は初めてではない。この本丸は、複数人の新たな審神者を育成し、強靱な刀剣を育て上げ、高実績を保ち続けているため、こういうった要請へも対応を行っている。

さて、緊急性を匂わす入電の様子に、この本丸の審神者である彼、シキ（42）はたばこを灰皿に押し付けてから重たい腰をあげ、連れていく第一部隊へと指示を出しに行くのだった。

そこは、異常な場所だった。

審神者の力が満ちてはいるので、見た目は綺麗な状態。ただし、暗闇で虫の音も風にふかれて聞こえるだろう葉のささやきもない。無音。異常なまでの無の空間だ。

本丸への入り口は閉ざされており、なにやら封をするかのように札がはられていた。

それを審神者の力で強引に突破すれば、広がる景色はこれまでのブラック本丸とは様子が違う。

とにかく、本丸は広い。さっさと仕事を終わらせるために早々に、もちろん警戒しながら前へと進んで行く。

庭を横切り、何事もなく建物に到着する。

本丸の造りは大体どこも同じなので、迷うことなくそれはもうあっさりと縁側の広がる広い木造の建物へたどり着いてしまった。

「変、ですね…」

邪魔もなく、すんなりと進んで来れたことに、他のブラック本丸への殴り込みを経験していた堀川国広が呟く。

その澄んだ蒼い瞳を周囲の暗闇へ向けつつ、横にいる相棒である和泉守兼定も眉を潜める。

静寂が広がる異様な空間に、ああ、と相槌を打つのは布の下から鋭い眼差しでアタリを警戒する山姥切国広だ。

「主、今回は救出も含まれていたといってたな」

「そうだ、ここの審神者捕縛と一緒にな」

「だったら、ここの本丸の刀剣達はどこにいったんでしよう」

シキを守りながら散開している他の刀剣も眉を潜めた。

「皆さん、ひとまず中に進んでみませんか？」

唯一の短刀である平野藤四郎が主であるシキに寄り添いながら提案をした。それに頷き、無造作に庭から木造の廊下へと足を踏み入れたときだった。

「…っ！」

「主、後ろへ!!」

すぐさま反応したのは、平野だ。

天井裏から突如現れた敵に主を庇うため、相手の刀を受け止めギリギリと鏢迫り合いを行う。

堀川は主の前へ、そして、背後を警戒した山姥切や和泉守は迫ってくる打刀と戦闘を開始する。

「主…庭はお任せください！」

先ほどまでなにもいなかった庭からも検非違使が近づく。それにいち早く反応したのはへし切長谷部だ。

「骨喰は主の守りを！」

「わかった」

骨喰藤四郎は刀を構えつつ、堀川と共に主の護衛に回った。

「くっ…そっ！」

キンツと刀を弾いた平野は、相手の懐にするりとはいり一閃、さらに止めとばかりに背後に回り首へ一閃放つ。

「なぜ検非違使が！」

「さつきまでは気配すら感じさせなかったのに…」

平野が左上から飛来した脇差しを倒すと同じく、右から迫っていた打刀を山姥切と和泉守が一閃してあつという間に黙らせ、さらには庭から着ていた打刀と短刀を長谷部の速い太刀が凧いで倒した。

倒しきると、また静寂が戻ってくる。

だが、何か先ほどと様子が変わった。

「……あ、風が吹いてる?」

堀川が先ほどまでとの違いに気づくと、ふと、平野が何かに反応した。

「どうした?」

「えと、なにか不思議な気配があちらから…」

気のせいでしょうか、と首を捻る平野は様子を見てきますとシキに伺いをたてた。シキが頷くと平野は足音を絶ちつつ廊下の先へと走っていった。

「あの方向だと、鍛刀部屋がある方向だね」

「…気になるなら行ってみるか? 国広」

「うーん、行っていいですか、主さん」

「構わん、和泉守も行ってみてくれ」

「おう」

堀川と和泉守も、平野の後を追うように駆け出した。

「虫の音も聞こえるようになったな」

「ここは、いつもの本丸とは、なにか違う」

「そうだな…刀剣が見当たらないのもそうだが、検非違使が現れるとは…」

この後はどうするかとシキを中心に三振りは意見を交わす。

通常であれば、審神者の執務室や刀剣がいそうな場所を探すのだが…。

そんな話をしながら前田達を待っていると、三振りが行った先から和泉守が走ってきた。

「主!来てくれ、鍛刀部屋が封じられている!」

「封?…山姥切、長谷部、骨喰もついてきてくれ」

シキの言葉に頷き、4人は和泉守の後を追った。

真つ黒本丸撲滅部隊参上！（救出目線） 続

和泉守のあとを追いたどり着いた鍛刀部屋の前では、パツと見は普通の閉じられた襖に手を掛け、開けようとしている堀川と、見守る平野がいた。

見た目は普通、横に引けばわずかにカタカタと音をたてる、が、両開きのそれはぴったりとくっついていていた。

和泉守が見てるとばかりに力を込めて叩くと、ドンドンと鈍い音になる。襖は綱でも入ったかのように突き破ることなく和泉守の拳を受け止めたのだった。

「弾かれはしないが開かねーんだ」

「おそらくですけど、内側から閉じられているのではないのでしょうか？」

「…そうだな。審神者がやってんなら俺が開けられるだろう」

シキは状況と一緒に確認した骨喰、長谷部、山姥切に他にも同じ状況の場所がないか探すよう命をだす。もちろん審神者の部屋や、刀剣各自の部屋に該当しそうな場所、手入れ部屋や刀装部屋などを重点的にするよう声をかける。

それを受け、各々うなずき、または、返事をし散っていく背中を見送る。

そんなときであった。

……………だ、れ

くぐもった、弱々しい声。どこか透き通った女性の声が鍛刀部屋の中から聞こえる。

はじかれるように平野が答えた。

「どなたかつ、中にいらつしやるんですか？中から開けられますか？」しばらく中の様子を伺う。

するとまた、確かに声がした。

だして、と。

弱っているのか、小さく咳き込む音が聞こえ、シキはすぐに動いた。「いま助ける！近くにいないなら危ないから離れてくれ」

襖に手のひらを当てまるで見えない噛み合わない歯車の原因を探るように力を注ぐ。ここの審神者はどうやら論理的な思考力をもっているようだ。歯車は回ればただの結界だが、それをあえて塞ぎ止めるかのように小さな噛み合わない欠片を詰めることで善いものを悪いものに変換しているようだ。

：ようは、欠片さえ取り除けば、力任せに結界を壊すことができるということ…。

(離れるとは言ったが動ける状態か不明だ。手順を踏んで解いたほうが良さそうだな…)

結界に侵入し、歯車のようなその歪みの原因となる欠片を見つけ破壊する。

(どうやら質の悪い審神者みてえだな…が、詰めが甘い)

あつさり欠片をパキリと砕くと、耳鳴りのようなきーんっとした音を立てて歯車が廻りだす。もちろんそれは審神者の力の例えだが、その歯車を力任せにシキは壊した。そう、自分の荒い審神者としての力とやらをおもいつきりぶつけて破壊したのだ。

そして襖に手をやり横へと力をいれて開けながら、シキの脳裏にはふとした疑問が沸き上がった。

たしか事前の情報ではここの審神者はひよろつとした見た目の理系な男だったはずだ。

(…なんで女の声がするんだ?)

その疑問は開けた部屋の向こうにあった。

「……………っ!!」

シキと共に中を見た、平野、堀川、和泉守も異常な、そして、酷く歪んだ狂気が充満していたであろう部屋をみて息を呑んだ。

折れた刀、散乱する破片、染み付いた血痕の後と、部屋の真ん中で倒れた男。そしてその目の前に座り込んだ赤い縄で身動きがとれなくなった白い女性。

明かりのなかった部屋にぼんやりとその女性は明るく浮かび上がり、呆然とした表情で襖を開けたシキ達を蜂蜜のようなとろりとした瞳で見つめていた。

そう、これが最初の出会いである。
シキという一人の審神者と、女性鶴丸国永（混ざりもの）との。そ
してこれからであうだろう出会いの1頁目である。

ひとまず場所を変えましょう

「おかえ…うわああ！シキさんが儂い系美少女捕まえてきた！この口リコン!!」

「……………怒」

ゴチンつと少女の頭に落とされた拳は、ロリコンと叫んだ見習い審神者を一時的にはあるが黙らせた。

傍らにうづくまり、うぐうつと呻く少女を心配そうにおろおろと見るのは仲の良い乱藤四郎だ。

「つたく、他に言葉はねーのか?」

その様子を眺めていた和泉守は、呆れた視線を見習い審神者にむけるが、涙目の見習いもまだ負けてなかった。

「だってだって！ブラック退治から帰ってきたとおもって出迎えたら、女の人に飢えてなさそうなのに女の人にちよーつめたいイケオジが！お姫さまだっことかして！真っ白美少女（金瞳で儂い系）お持ち帰りしてきたら誰だって突っ込みたくなるじゃん!!」

ビシイつとしかめっ面のシキと、腕に抱かれた白髪のとろりとした金の両目をきよとりと見習いにむけた（何故か和泉守の上着を身体に巻き付けた）少女に指を突きつけた。

それに行儀が悪いと長谷部は文句を言っているが、シキはため息をひとつついた。

「とにかく、俺は手入れ部屋にいつてくるから、このアホに説明軽くしといてくれ」

「…わかった」

部隊長であった山姥切の返事を確認し、シキは手入れ部屋へと足を向けるのだった。

「えっ！ちよ、シキさーん!?!」

「あ！あるじさーん、おかえりーまたあとでね!」

「ちよ、乱ちやんお出迎えに来たから間違いないけど、タイミングー!しかも、少女を手入れとか間違っつてない!?!」

「えー?だって、あるじさんと一緒にいたの、怪我した刀でしょ?」

「え？」

「え？」

混乱状態な見習いをとりあえず審神者部屋で主を待ちながら説明すると山姥切が疲れたように言い、そんな山姥切に堀川も苦笑いをするのだった。

乱は兄弟刀である平野へ視線をやり、平野は困ったように首を傾げた。

「えつと、どこまでお話して良いのかわかりませんので、ひとまず見習いさんにだけお話します」

「えー。…まあ、しょうがないかあ」

諦めた乱に、すみませんと謝りながら、お茶を用意してきますねと厨、ようはキッチンへと向かう。

山姥切は見習いについてこいと一言告げ、審神者部屋へ。

長谷部もその後を追ひ、見習いも慌てて追いかけていった。

残ったメンバーはとりあえず指示がでるまで解散するかと、それぞれ散っていくのだった。

場面はうつり、「わたし」はイケオジの腕の中で下から見てもイケメンだなあとか思いながら、ふと目を伏せてここまでの出来事を思い出していた。

暗い部屋。

動けない自分の身体（赤い縄のせい）。

目の前の死体（これ、「あるじ」らしいよ？あるじってなんだろう、「審神者」とか知識はあるからなんとなくわかるけど、なんか違和感。てかこの知識どこからきてるんだろう）。

沢山の折れた刀（これ、一番重要だけど、「わたし」じゃない「俺」であり混ざった「わたし」？意味わからん）。

そんな状況で閉じられた襖を開けたイケオジ。

そりゃ、びつくりするよね。畳とか壁とか血だらけだったし、死体もあるし。

このイケオジは「あるじ」ではないけど、死体と同じ存在であるこ

とは何故かわかり、またまた何故か「わたし」とおなじ『刀』の付喪神が大、中、小。

『刀』とか…え、知識からするとわたし「人間」やめてる？

驚愕の後に、深刻そうな表情へと変わった人たち。

身動きせずこちらを見たままの彼等へ、わたしの選んだ一言はこれだった。

「……………こんばんわ？」

自然とこてりと微妙に首を傾げて言った。

これが間違いだったようで、なんかしらないがぐつと眉間にシワを寄せ切なげな、なんともいえない（色気いっぱいだった）表情を浮かべたイケオジは、折れた刀を跨ぎ、血ぬれの死体を横切り、なんとわたしの頬へするりと手を滑らせてきた。

「……………すまん、またせたな」

良い声だとか、場違いなこと考えたけど、ここでやつと頬にあたる温もりが、「いま」が現実であると証明して、目が熱くなる。

たぶん、「わたし」だった頃なら泣いていた。

でも、いまのわたしの目からは涙は出てくれなかった。

その後はそのイケオジの後ろにいた身長高いめつちや髪の毛長いイケメンが浅葱色の服をわたしに巻き付いたり、なにしてんだろうとか思ってたら全く動かなかった身体が傾いでイケオジの腕のなかに。

なんかいろいろ話してたけど、それどころじゃなかった。

え、このイケオジ色気やばい良い匂いするてか案外筋肉質で鍛えてるとか、なんかいろいろ情報が入ってきて頭ばーんになった。

固まったまま（縄で動けないのもあるけど）拐われるように部屋を出て、廊下を進み、庭を抜け、気づいたら三人だった付喪神が六人に増えたりしてたのも気づかず、良くわからないうちに大きな門を潜って別の御屋敷へとはこぼれていたのでした。まる。

（なんでこうなったんだろう…）

そして現在進行形で似たような道順で似たような造り（こつちのほうが見事に綺麗だし畳の良い香りがした）の部屋へとたどり着く。

え、また同じことにならないよね？助けてくれたんだよね？

とか余計なこと考えてちよつと不安になつたけど、さすがイケオジ、不安になつたこともお見通しなのか綺麗な畳の上に座りわたしを「抱き込み」(ここ重要) 膝の上へのせた後、片手で頭を撫でてきた。わたし、は、こんらん、した

(ふあ!?なにしてんのこのイケオジー!!!)

なぜか口が聞けなくなつたようにはくはくと、空気が口からもれるだけで声を出せない。出せてたら叫んでた。うん。

手入れをするよ

これまで、それなりにブラック本丸なる場所へ、政府の指示を受け突撃をしてきたが、今回のソレは異常であり、シキの感情を揺さぶる程度には衝撃を与えていた。

もともとの指令では、審神者の捕縛と刀剣の救助。

だが、ついさきほど立ち去った本丸には見たことのない、しかし、誰かは推測できる付喪神らしき女性と、息絶えた骸の姿。おそらく審神者であろう男の亡骸が転がっていただけであり、他の部屋を簡単に見回ってきた結果ももぬけの殻だとの報告のみだった。

それよりも最優先事項は、己の腕におさまる温もりだ。

本体となる腰の刀と一緒に赤い縄でぐるぐる巻きにされ、おそらく呪がかけられている刀剣の付喪神。

外見は真っ白な長い髪に金の瞳、色白で、とにかく本来の付喪神の衣装と似通った装飾をあしらったフード付きの戦衣装。そして、見覚えのある刀の拵え、そう、あの刀剣であることは想像がつく。

手入れ部屋に近づくにつれ、顔がこわばり不安そうにしている、らしくない姿。

『鶴丸国永』である。

女の姿や、子供の姿、色が違うなど時折普通とは違う顕現のされ方があることは耳にしたことがあるが、そのほとんどは偶然という奇跡との話だったが、今回の場合は偶然ではないと考えられる。

(でなきや、あんな数の折れた鶴丸国永が大量にあるわけない…か)

ついには手入れ部屋にたどり着くも、ゆらゆらと揺れる瞳に個体差があっても同情と憐憫を覚えない訳がない。

柄にもなくどっかりと胡座をかいた上に彼女を座らせて、ぽふぽふと頭を撫でていた。

「あー…まあ、そこまで不安がるな、お前さんをひとまず手入れさせてもらいたいだけだから」

「ていれ…」

「ああ。まずはその縄をどうにかしねーと、身動きがとれねえだろ」

彼女はシキの瞳をじつ…と見つめ、「ん」と小さく返事をした。

(鶴丸国永つていやあ、うちのやつも変わりもんだが、こっちはこつちで大人しいのか、警戒しているのか…まあ、本人が手入れを受ける気になったんなら関係ねーな)

よし、ともう一度頭を撫でてから、忌々しい縄に手をかざす。必要以上にねっとり死んだ審神者の気配がするので、強制的に上書きをしようと力を込める。

じわり、じわりと赤い縄の色が黒く変色していく。

罨の気配はなく、彼女の動きを、力を封じるものらしかった。プツリと太い縄の一部が切れれば、後は簡単だった。ざわり、と彼女から力が漏れ出す。それは白く発光して残りの絡み付いた縄を瞬時に燃えかすのような何かに変えた。

「?!…っおい！」

「……あ…っ……こわ、こわい…なに」

「おい！しっかりしろ！」

その吹き出した力には意思が込められていないため、攻撃性も全くない単なる力の暴走のようなもの。しかしその力は大きく腕のなかで彼女が頭を抱えた。急いで片腕で彼女を力強く抱え込み抱き締める。

「落ち着け、ここにお前の敵はいない、ゆつくり息を吸って吐け」

大丈夫だ、そう耳元で囁きながら右手で彼女の頭を撫でる。息を詰めていた彼女が、細く、小さく、だが確かに呼吸をし空気を循環させている。そして、そつと彼女の左手がシキの服を掴み、次第に身体力が抜けていく。

いつの間にか、彼女の溢れた光は消えていたのだった。

手入れをするらしいです

プールとかに後ろから落ちたときの浮遊感と怖さが分かるだろうか。

覚悟も心の準備もしてない油断しているときに、いきなり押されて重力に引つ張られて、背中から落ちた状態。

まさに、いま「わたし」が体験した感覚はこれだった。

イケオジが赤い縄に手をかざしたら、なぜか黒く変色していつて、ジリジリ引きちぎられていくのを不思議な気持ちでそれこそ無防備に眺めていた。あ、切れるって思ってたやっとなんてのんきに考えたときに、それはやってきた。

たぶん、空耳。でも、耳元でどぶんって水に落とされた音が聞こえた気がした。いきなり地面がなくなった感覚。回りの音が聞こえない。浮遊感。ぐわんって脳が揺れて上下の感覚が分からなくて、こわくて、こわくて。

心臓が大きく鳴ってる。

海みたいな海流に揉まれる。

どくどく、呼吸があさくなる。

訳が分からず、ひたすらぎゅつと目をつぶって、無意識に助けをもとめる。

ああ、ここにきてから意味が分からない。

「わたし」の中にたかさんの、なにかが、いる。

たかさんの、「俺」が、「わたし」を覗いている。

異物を、その他な「わたし」を、みてる。

「ここ」は、まだ、だめだ。

こわい

そんなときだった。

ストーンと落ちてきた「大丈夫だ」のことば。

あ、あのイケオジの声だ。

どこ、たすけて。

何度も聞こえるこえ。

たぶん、こんな異常な状況のせいだ。

「わたし」は無意識に左手でなにかを掴み微睡む。

ああ、ここなら、あんしんなんだ。



……いやいやいや、なにヒロインみたいなことを、こっ恥ずかしいことしてんの。

うわあああ、いや、確かにこわかった。

意味が分からない経験のしたことのない感覚に戸惑いより恐怖！

そう、畏れを感じたのは仕方ない、うん。

そんなときに、イケボな呪文「大丈夫」とか聞こえちゃったら、すがり付きたくなるじゃん。

警戒もしないですがったよね。

後の事なんて考えないでさ。

だから、後になった今現在、内心で悶える。

あのあと、すやあしたわたし。

気づいたらふかふかな布団に寝てました。

ど、どうなったの、あのあとー!?

…

と、とりあえず起き上がるか。外は明るいみたいだからもしかして結構長く寝ちやったのかな。

上体を起こして周りを見渡せば部屋のすみにある等身大の鏡が。なんか、布かけられて見えないから、まず自分がどうなってるのか確認するか。

ごそごそと起き上がり、鏡の前に移動。布をめくれば…

「……だれ」

真っ白ふわふわな長髪（寝癖かな、ちよつとくるんってなってる）、少し長い前髪から見える目尻が垂れてるくりつとした金色の目。白い戦装束？なんか見覚えあるけど、下はスカートみたいな袴だった。

え、というか白い。儂い美少女が鏡越しにコチラを見ていた。

あれ、「わたし」ってこんななんだっけ？

なんか黒髪とかだった気がするし、こんな美少女じゃなかった気も、あれー??

なんか記憶がぐちゃぐちゃしてて、思い出せないけど、確実に変貌したことは理解した。

っていうか、「わたし」が誰か考えると、「鶴丸国永」っていう刀剣だっけ答えが沸き上がってくる。

えー、あれ、人間じゃなかったっけ？あれー??

だめだ、混乱してる。

とりあえず鏡から離れ(布はもちろんもとに戻しました)、部屋のなかを眺めて気づく。

あ、あれ「わたし」だ。

布団の頭のところに置いてある刀剣を見て、確信した時点で、「わたし」はもう戻れない状態であったのに、このときの自分はまったくそのことに気づかなかったのだった。

伊達組登場……か？

このシキという審神者のもとには、自然と様々な刀剣が集まってくる。

シキ本人が鍛刀したものの、戦場で拾われたもの、ブラック本丸から希望がありやってきたもの、さらには政府からの依頼でやってきたものまで。

さまざまな刀剣男士達が集まっている。

さらには、ブラック本丸対策として教育もかねて見習いの審神者なんてものもいたりする。現状はシキの姪のみだが、まえば片手で数えるほどの人数を世話したこともあった。

そんなシキのもとには、他の通常本丸とは異なる性格や容姿をしている変わり種の刀剣も存在していた。

そんな一人である、『黒い』フードを被った白髪青年がその気配を一番に察知したのは必然であろう。

姿こそ多少異なるが、元は同じ刀剣なのだから。

「鶴さん、どうかしたのかい？」

傍らにいた長身の眼帯をした燭台切光忠は、ふとなにかに反応して、廊下を振り返った鶴丸に声をかけた。

フードから覗く金色の瞳はにんまり細まり、ちらりと相方を見た。

「いやなに、目が覚めたみたいだ」

「えっ、昨日の女の子？」

「ああ。おい光坊、どこいくきだ？」

慌ただしく振り返っていた先の廊下に向かっていく燭台切に鶴丸は首をかしげる。黒い布地に金の鎖がしやらりと音を立てた。

「先に主に声掛けに行かなくていいのか？」

「そうだけど、目が覚めたなら一人じゃ不安だろうし…そうだ、鶴さん、報告任せてもいいかな？」

「まあ構わないが…っておーい……」

返事を待たずにスタスタと去っていく燭台切に鶴丸はふう、とため息をこぼした。

「…俺も主んといくか。さーて、どんな驚きがあるかねえ」

審神者の部屋に向かいながら頭の後ろで手を組むと、昨日のことをふと思い出した。

帰ってきた主が、手入れ部屋に入ってまもなく、鶴丸に干渉する何かが爆発した。何かが流れ込んだのか、持っついていかれたのかも分からないが、原因は手入れされた同族、鶴丸国永だろう。

乱藤四郎が、主が女を連れ帰ったと騒いだため、詳細は不明だが訳アリがまた一人増えたことは、この本丸にいる大半の刀剣にはあるていど広がっている。

なにか面白いことがある、そう期待して鶴丸は黒いフードを深く被った。

そこから覗く薄い唇は三日月のように弧を描いているのだった。



少し急過ぎただろうか。

この時、燭台切光忠は歩く速さを少し弛めてそう思った。先ほどもで共にいた鶴丸国永は、もともとブラック本丸にいた刀剣だった。

そして今回主に拾われたのもまたブラック本丸の、かなり訳アリであらう鶴丸国永。

まだ会わせるのは速いのではと戸惑いが先行してしまった。聡い彼の事だ。この考えも見通されている気もするが、主が連れてきた刀剣なのだ。悪いようにはならないはず。そうは考えても不安が頭をよぎってしまったので仕方ない。

それに、鶴丸国永との縁がある燭台切は、まだその『彼女』を見たことがなかった。興味もある。

(鶴さんは譲ってくれた…ってところかな)

そう苦笑しながら、手入れ後に寝かされていると聞かされた部屋の手前、角を曲がった先に誰かがいた。

「あ、加羅ちゃん」

ハツとした表情でこちらを見た大俱利伽羅は、居心地悪げにまごつ

く。

彼の右手には恐らく庭で摘んだと思われる花が。

「お見舞い、かな。一緒にどうだい？」

「……………ああ」

珍しく関係ないと立ち去ること無く、2人は並んで『彼女』の部屋の前に。

そのときだった。

—— だれ

布が擦れる音、そしてか細い高めの声が障子の向こうから聞こえた。

声の様子から自分たちに気づいたわけではないことは分かったが、『だれ』とはどういう意味だろうか。

記憶が混濁しているのか、喪失していることも考えて少し顔がこわばる。

身動きがとれず、しばらく無言で立ち止まってしまった障子の向こうでまた布の擦れる音、そして、よく耳に聞き馴染んだ、カチャリとした刀の音にハツとして慌てて声をかけた。

「…おはようっ、ここを開けてもいいかな？」

中の音がしなくなった。

ただその静寂はすぐに無くなる。

「……………どう、ぞ」

了承の声に安堵しつつ、失礼するね、と障子を横に引いた。

そして息を呑むことになる。

「……………っ」

そこには障子を開けたことにより、太陽の光が射し込み輝く白い長髪の怯えた瞳の『鶴丸国永』が、刀剣を両手で抱き締めて立っていた。表情は固まっているが、身体は正直だ。

燭台切と大俱利伽羅を見たとき、小さく刀剣を握り直した。

そして胸の前で刀を握っていることで見えてしまった手首の赤い痣。まるで縄で締め付けられたかのようにグルリと巻き付く赤い痣。

彼女は自分たちの視線が赤い痣に向かっているのに気づいたのか

袖を伸ばしてそれを隠してしまった。

少し気まずい雰囲気だが、燭台切はふわりとした笑みを心がけて笑いかけた。

「おはよう、僕は燭台切光忠。あと、彼は」

「……大俱利伽羅だ。……その」

大俱利伽羅はゆらりと瞳を揺らすが、きゅつと唇を噛み、彼女に歩み寄る。その腕が届きそうな、届かなそうな距離感で立ち止まると、すつと右手に握っていた花を、押し付けるように差し出した。

ぽかんとする彼女は、少し固まっていたが、それ以上に大俱利伽羅も固まっていた。

(が、がんばれ加羅ちゃん!!)

普段は見れないそんな姿を、どこか感動したように見つめ燭台切は応援する。

「あ、えと、わたし?」

「……やる……受けとれ」

眉間にしわを寄せて、非常に怖い表情になっているが、褐色の肌はどこか赤くなっているようだ。

「…ありがとう」

ふにやと笑って花を受け取った彼女は、自分の右手を刀剣ではなく花を握った。

そして、困ったような少し訳なさそうな表情に変化する。

「あの、わたしは、たぶん『鶴丸国永』かな」

「……そうか」

彼女の“たぶん”は、なにか深い意味があるんだろう。

大俱利伽羅もなにか察したのか、空になった右手をそのまま彼女の頭にのせくしやりと撫ぜた。

そしてくるりと背を向け、さっそうと部屋からでていってしまった。

「あ、ちょー加羅ちゃん!……もう、ごめんね、えと」

なんて呼ぼうか悩んでいると、彼女が先に口を開いた。

「無理に呼ばなくていいよ、光忠…さん。ここ、鶴丸国永さんいるんだ

もんね」

「あつと、もしかして分かるの?」

「……………」

眉をハの字にした彼女に、しまったと思う。

鶴さんがわかったのだ。同じ鶴丸国永ならあり得る話だった。

ここはシキの、主の本丸。変わり種が多い大所帯な本丸だ。なにをいまさら、と燭台切は頭を振った。

「僕のごときは好きに呼んでね。よろしく」

そつと握手をしようと手をさしのべたが、その手を彼女はじつと見つめるだけだった。

そして、ハツとした。いまの彼女の右手には花、左手には刀が握られており、手が空いてないのもそうだが、そもそも、怯えを見せた彼女がすぐに順応するのは難しいということに。

ここで、もう少し待っていれば光忠は普通に握手してもらえたであろうが、すぐさま首の後ろにもっていつてしまい、多少のすれ違いが発生した。

「んーと…鶴丸…さん?なんて呼んでいいかわからないけど、ごめんね」

身支度したかったよね、と笑い、外で待ってるねと障子をそつと閉めてしまう。

彼女がどんな様子でこちらをみていたかもしらずに。

受け入れる

枕元にあったその刀。

白と金の鎖は鏡の中にいた「わたし」の色とそっくり。

両手でその刀を持ち上げる。

じわり、と掌が熱くなるような、鎖の擦れる音に心臓がヒヤリとするような。

よくわからない感覚だが、自分に何かか混じり、逆に何かに侵食している、混ざり会う、変なかんじ。

(これが、鶴丸国永、わたしが、わたしの中の俺も……あれ?)

この部屋の外。少し離れたところからも少し違う『俺』がいる。

それは不思議な気分だった。

わたしと混じった彼らとは違う、でも同じ存在。

(あ……きづかれた……)

こちらを金色の目がちらりと覗いた気がした。ざわりと混ざったものが揺らめく。

まだ馴れないその揺らめきに両手で握った刀をぎゅっと握り胸に引き寄せたのは無意識だった。

そんなとき、障子の向こうから優しげな低い男性の声が聞こえた。

「おはようっ、ここを開けてもいいかな？」

…正直に言おう。

え、耳が孕むわ……。

……………いい、いやそーじやない。

「……………どう、ぞ」

あわてて了承すると、失礼するね、と障子が横にスライドする。

そしてそこにたたずむ2人の男性に目を向けた。

……………ここってイケメンしか入室禁止とかにしているのかと疑ってしまうような、おそらく刀剣の付喪神が2人と目が合う。

「……………っ」

太陽の後光が射してるそこから来たのは、褐色の男性と、その男性

より少し背の高い眼帯の男性。

(え、え、だれ。イケオジの次はイケメンが来たんだけど…)

呆然と立ち尽くすが、身体は正直みたいだ。

無意識に手に握りしめていた自分を握り直していた。

まるでさすがのように、己を守るように。

そして胸の前で刀を握っていることで、気づかなかった変化に気づいてしまった。まるで縄で締め付けられたかのようにグルリと巻き付く手首に浮かぶ赤い痣。

(うわ、なにこれ！まだ跡ついてるじゃん！)

肌が白いからこそ、その赤い痣は色鮮やかに浮き出っていて、なんだか気持ち悪くていそいで袖で隠した。

そりや、あんなに縄でぐるぐるになってたら跡も付くだろうけど…あの審神者？ほんと悪趣味だなあ…と考えるのも一瞬で、こちらを伺う目の前の男性の存在を思い出し、慌ててそちらに視線をむけた。

そして、そこにかぶイケメンの眩し笑顔に心臓止まるかと思っ
た。

「おはよう、僕は燭台切光忠。あと、彼は」

「……大俱利伽羅だ。……その」

大俱利伽羅と名乗った褐色の男性は、戸惑った様子だったが、こちらに近づいてきた。

そしてなぜか右腕を付き出してきた。

拳の中には、いままさに摘んできましたというような花。

正直に言おう。

え、なにこの人かわいい。

えー、なんか耳赤くなってるない？

お見舞いなのかな、うわー、イケメンが照れてる！

かわいい!!

「あ、えと、わたし? (…にくれるのかな?)」

「……やる……さ、さっさと受けとれっ」

……くっ！さらにツンデレだと!?

なんて口には出さずそつと右手を刀から放して、その可憐な花を受

け取った。

手が震えてなかったか不安だ。

「…ありがと、う」

初めて会った人から花を貰えて驚きだ。

心が温かくなるような、気恥ずかしいような、くすぐったさにふにやと笑み崩れてしまった。

……つと、えーとこの人が大俱利伽羅で、眼帯お兄さんが燭台切光忠…なんか、『わたし』というより混ざった『俺』に縁のある付喪神みたいだ。

表の人格は『わたし』になってしまっているため、親しげに話しかけるのは気が引ける。困ったような少し申し訳なさそうな複雑な気持ちのままそうつと声を出した。

「あの、わたしは、たぶん『鶴丸国永』かな」

「……そうか」

(あなた達の知っている彼でなくてごめんなさい)

花に浮かれた心も、その現実に萎れてしまったが、大俱利伽羅が空いた右手でわたしの髪をくしゃりと撫ぜたことで、また思考がどっかにいきそうになった。

「また、くる」

そしてくるりと背を向け、さっそうと部屋からでていってしまった。

「あ、ちょー！加羅ちゃん！……もう、ごめんね、えと」

慌てたのは燭台切光忠さんだった。

「無理に呼ばなくていいよ、光忠…さん。ここ、鶴丸国永さんいるんだもんね」

「あつと、もしかして分かるの?」

「……………」

そう、この部屋の外、離れた場所にいた彼も鶴丸国永だ。

「わたし」の中にいる鶴丸国永とは、どこか雰囲気異なってるみたいだけど…。

たぶん、この光忠さんもその彼と面識があるのだろう。

何て呼ぶか悩んでいるということはずぐにわかった。

(わたしだった頃の名前思い出せれば良かったんだけど、思い出せないし…)

どうするか、おおくりからさん、……ながいので加羅くんがいいか。

うーん、鶴丸さんは「加羅坊」とか呼んでいたみたいだけど、わたしはなんだか抵抗あるし。

光忠さんは：「光坊」か：あれ、鶴丸さんって案外年上？

いやでもなー、なんて悩んでいたら目の前のイケメンから声をかけられた。

「僕のこととは好きに呼んでね。よろしく」

そつと差し伸べられる手。

握手：なんだろうな。でも、手を伸ばすと縄の跡見えちゃうし：すぐそこに置いてあった手袋しておけばよかったと後悔しても遅い。

というか、“よろしく”ってどういう意味だろう。

わたしってどうなるんだろう。あるじ？みたいな審神者は自殺しちゃったし…。

差し出された黒い手袋をした男の人の大きな手を見ながら、悶々と考えこんだのがいけなかったのか、光忠さんが困ったように差し出してくれていた手をそのまま自分の首の後ろに持っていった。

その手を無意識で追いかけると、眼帯のついていない左目が揺れていた。

(あ、握手：し損ねちゃった)

「んーと：鶴丸：さん？なんて呼んでいいかわからないけど、ごめんね」

身支度したかったよね、と笑い、外で待ってるねと障子を閉められてしまった。

「…あ………」

(そうじゃないのに…)

嫌なわけではない、思考に埋もれてしまうのは混乱してるから、なんだろうけど。

でも握手が嫌だったわけでもないのになあ。

「…むずかしい…」

ぽつりとこぼれたつぶやきは、一人残された部屋に吸い込まれていった。

自己紹介できるかな

ひとまず、部屋の外で待っている様子なので、待たせては悪いと身支度を整える。

といってもこの真っ白の恰好に手袋とかして戦装束を整え、あえて刀は両手でぎゅっと抱きしめるように握りしめて終わりだ。

なぜ手で刀を持つかというのと、なんだか落ち着くからという精神安定剤替わりである。

寝てた布団はきれいに片付け（隅っこに畳んただけだけど）、もう一度鏡で全身を確認する。

やっぱり白い猫みたいな美少女が映ってる。

どこか不安そうに見つめ合い、無意識に刀を握った。

わたし：鶴丸国永なのかな。

「わたし」は違うと思ったんだけど、わたしの中にはいっぱい鶴丸国永がいるみたいだし。

ああ、もうわけわからないと、首をぶんぶん振ったあと、先ほどの出入り口であるだろう障子に向かった。

そつと開けて恐る恐る顔を出すと、少し離れたところに長身の黒い姿、光忠さんの後ろ姿があった。

そして、だれかと話しをしているみたいだ。

そうつと覗いていると、話し相手の一人と目があってしまった。

かわいい巫女姿の黒髪ボブショートの子。

目を丸くしている少女とガツチリと視線が絡んでしまつてそらせない。

「……………」（わたし固まる）

「……………」（少女驚く）

じりつと少女がこちらに一步近づいてきた。

なんか…圧が…。

じりつとわたしも部屋に戻りそうになった。

そしてお互い固まる。（視線はやっぱり逸らせない）

「なにしてんの、みーなーらーいー」

「いたっ！」

膠着状態を解いたのは、少女の後ろにいた赤い瞳の綺麗な青年だった。

黒髪で赤目の猫みたいな青年だ。

光忠さんと比べると背はそこまで高くないみたいだが、少女より少し高いみたい。

その彼がべしつと少女の頭をはたいていた。

「ちよつ、なにすんのー?!」

「こつちのセリフー。ほら、向こうがおびえてるじゃん」

その青年の言葉に光忠さんを含めてこちらを見る少女と青年。

その青年の後ろにも誰かいるみたいだ。

「わあ、本当に女の子なんだね！」

ひよっこり出てきたのは、髪をポニーテールにしている青い青年だった。

「ちよつとー、安定も驚かさないでよー？」

「そんなことしないって。せつかくなんだし仲良くしたいじゃん」

「…つていつでも鶴丸は固まりっぱなしなんだけど」

「あ、ごめんねー、自己紹介したいんだけど、声かけて大丈夫？」

「私も私も！うわー、めっちゃ美少女！仲良くしたいっなでなでしたいー！」

「はい、おちつけー」

再度べしつと今度はおでこをはたかれた少女に、まあまあと光忠さんは苦笑している。

そしてこちらにニコリと笑いかけ、おいでおいでと手で招かれた。

「ここの本丸のメンバーだよ、もう出てこれるかな？」

「……………」

きよろりと周りを見回した後、そつと廊下に進んだ。

外は覗いていた時に見えていた通り快晴で、緑の葉っぱがさやさやと風に吹かれている。

そして薄ピンクに咲く桜に、春なんだとほつり心でつぶやいた。

わたしが近づくのを今か今かと待ち構えている4人に向つてそつ

と歩みだした。

そして、光忠さんの後ろに隠れた。

「あれ、鶴さん？」

「ほらー、見習いが怖がらせるからあ」

「えっ！私なの?!ご、ごめんね、鶴丸ちゃん、怖くないよー、おいでおいでっ」

「それ、逆効果じゃない？」

心臓がどくどく鳴っているのがわかる。

どうしよう、つい隠れちゃった。

でも、がんばって、自己紹介：あれ、わたしは鶴丸国永と名乗って良いのかな。

ふいに不安が襲ってきて、持っていた刀を握りしめた。

そんなときだった。たぶんわたしパニックになっていたんだ。

じゃなければ、あんな…

「鶴さん、だいじょうぶ？」

伸ばされた手、大きな手のひら、こちらに向けられる黒い、手。

おとこのひと、の、手。

「……………っひ…」

気づいたら走り出していた。

後ろから声が聞こえた気がするが、耳にはあの声が聞こえた気がした。

—— ツルマル

—— アイシテイル、ツルマル

—— アイシテ：

血の匂いがした気がした…。

自己紹介できるかな（続）

こんなに「アイシテイル」という言葉が怖く感じるなんて。どこからか聞こえてくる。

気のせいじゃない、あの男の人だ。

死んだはず、目の前で折れた刀「鶴丸」で首を掻き切ってしんだ。自殺したはずだ。

こんな声、耳鳴りと一緒だ、気のせいだ、気のせいだつ、きのせいだ！

走っていた、歩いていて、いつの間にか座り込んでいた。

大きな木の下で。

枝垂桜に隠れてしまうように、縮こまって刀を抱きしめて。

あの言葉は「呪い」だ。

手首から覗く赤い縄の跡、こんなのにすぐに消えてしまうはずだ。

ねえ、こわいよ。

——なにが怖い？

逃げられない。

——なにかから逃げてる？

あの人。

——あのひと？

そう、あの…「あるじ」が。

風が吹くと同時にぞわりと寒気がする。

カタカタと体が震えている。

とまって、とまってよ、震えないで、戻らなきや。

——なんで？

心配させる、助けてもらったのに逃げ出しちゃった。

——そうだな、心配してるな

…だれ？

——もう、わかるだろう？

「…つるまる…？」

——大丈夫だ、「俺」達がいる

わたしの中から声がする。

呪いの声と、温かい声。

ふわりと風に乗って鼻をかすめるのは、血の匂いではなかった。

「……あ……」

大俱利伽羅からもらった花。

小さな花が胸元からこぼれた。

白い花びらが咲き誇る。「わたし」が覚えている花の一つ。

マーガレット。

大俱利伽羅は別に意味を込めたわけではないかもしれない。

だけれど……

「……信頼、か」

あなたたちの知っている鶴丸じゃない。

あの男の作った「わたし」(ツルマル)だ。

でも、混ざりものでも、鶴丸って言っているのいいのかな。

——どうしたい？

わからない。この耳に聞こえる呪いの声が「わたし」を否定している。

でも「わたし」はわたしだ。

——なら、「俺」は君だな

そうなのかな。そう、だったらいいな。

「わたし」を肯定してくれる「俺」達。

なら、そう。まだ怖いけど、でも、立たなくては。

——ほら、ちょうど来てくれたぞ

そのつぶやきが聞こえたと同時に、地面を走る足音をひろった。

「鶴さん！」

「見つけた、ちよつと大丈夫？」

光忠さんと赤目の青年。

「見習いー、安定あ、こつちにいた！」

「ほんと?!よかったっ」

「つるまるちゃーーん!よかったよお」

駆け寄る少女とポニーテールの青年。

そして丸まっているわたし。

ああ、探してくれたんだ：「わたし」を。

「えっと、近づいても大丈夫かな？」

少女が恐る恐る近づいてきた。

そうっと、まるで怖がらせないように静かに。

「…だ、いじょう、ぶ」

まだ怖い。けど、『信頼』したい。うそじゃない。

——君の怖いものは彼らなのかい？

ちがう、ちがうよ。だから…

「にげて、ごめんなさい…わたし…こ、こわくて」

「…うん、そうだよね。いきなりはびっくりさせちゃったよね、ごめん

ね」

ふわっと頭をなでられた。

少女の手は静かに、髪をすくように。

この手は、あの男の手じゃない。

大丈夫。だいじょうぶ。

——ああ、大丈夫だ。

「わたし」の中に声がこだまする。

刀と一緒に握りしめたマーガレット。

少し萎れてしまったが、それに勇気をもらって。

「わ、わたしは…鶴丸、国永…です」

目の前の少女に、温かい手の人に。

新たな仲間？

昨日は、ここ本丸の主であるシキがブラック本丸へ突入するという
ことで、刀剣達はみんないつ帰宅するか、傷は負っていないかと心配
をしていた。

そんな刀剣はここにも。

加州清光は同室の大和守安定にため息を吐いていた。

「そんなに心配しなくつても、主なら大丈夫だよ」

主であるシキは安定が来る前も何度かブラック本丸への潜入、戦
闘、捕獲、救出などを数度熟している。

だが、安定は初めてのことなので心配なのはわかるが、いつまでも
障子を開けっ放しで外を眺め続ける相棒に布団に寝そべりながらあ
くびをする。

「清光は心配じゃないの？」

「そーね…うちの主なら大丈夫だって、山姥切とかと一緒だし」

初期刀であり、最古参組がついていつていることも、清光を安心さ
せていた。

それに昔は清光も心配して玄関で一晩待ってたりしてたものだ。

だが、数をこなせば慣れが出てくる。

たとえば、黒い刀剣を持ち帰ろうが、真夜中までかかろうが、毎回誰
も傷一つなくけろつと帰ってくるのだ。

そして玄関で待っている刀剣に「まだ起きていたのか」なんて言わ
れちゃ、なんだか心配を通り越してしまう。

そう、顕現して日の短い刀剣程、心配して起き続け寝不足になり、だ
んだんとなれ、まああの主だし大丈夫か…という結論に行きつくあた
りでこの本丸に染まった古参と呼ばれるようになるのだった。

清光は初期刀ではないが、比較的初期時代に顕現した刀なのだ。

「今回は審神者の捕縛と刀剣の救助でしょ？敵が人間なら主だけでも
大丈夫なくらいだ」

「えー、そこまでいう？…うーん、確かに刀剣が敵に回らないなら本丸
で攻撃してくる存在もないだろうけどさあ」

「そこまでいーうーのー。だからさっさと寝て、明日朝一で主のところへ挨拶しに行くのが正解ってこと」

「でも…」

まだ渋る安定に苦笑いしながら、俺は寝るからねーと電気を消した。

月明りだけが部屋に差し込む形となり、外を眺めていた安定もため息をついてようやく障子を閉めて部屋へと退散した。

朝になり、早々に起き上がり身支度を始める。

さっさと眠りについた清光も、なにもまったく心配していないわけではなかった。

眠りが浅かったのか、まだ眠たそうな安定を横目に、今回はどんな感じだったのかと鏡で髪を整えながら考える。

(前は放置本丸で、刀剣も殺伐としていたみたいだけど…)

「清光、布団畳んじやうよー」

「ん？ああよろしくー」

布団を畳む安定、そして安定の爆発した頭を見てため息をついた。

「ちよつとー、いまから主のところ行くんだから髪なんとかしてよー？」

「え、わっ」

乱れた髪をくしでとかして、再度結わいなおす清光に、ありがとと安定が礼を言った。

「よし、それじゃ様子見にでもいきますかー」

「うん」

部屋を少し片づけてから、主の部屋へと向かう。

ブラック本丸へ行った後は、寝ずに後処理をしていることが多いため、審神者部屋と呼ばれる仕事部屋へと二人は向った。

案の定審神者部屋がにぎわっていた。

といっても朝早いこともあり、すし詰め状態になるわけではなかったが。

「あーるーじー、おかえり。今回はどうだったのー？」

「ああ、加州か。毎回朝からありがたいな、ケガはない」

「僕もいるよー、おはよー！心配してたんだから」

ひよっこりと空いてる部屋をのぞき込み軽く挨拶をする。

シキの様子はいつも通りだ。ただ、珍しい刀がそこにはいた。

「あれ、鶴丸？珍しいじゃん、どうしたの」

「おう、今回はちよつと驚きを提供してもらったからその挨拶だな」

「驚き？」

清光と安定は首をかしげる。

そこにいた黒い服の鶴丸はにやつと笑い、詳細は述べてくれない。

「2人ともおはよー！聞いてよー、シキさんったらすつごい美少女をお姫様抱っこしてお持ち帰りしてきたんだよー！」

「美少女？」

「お持ち帰り？」

まあ、所謂刀剣女士つてやつなんだけどね。と、シキに湯呑みを渡しながら見習いが横から口をはさんだ。

「人聞きの悪い言い方は寄せ、主に失礼だぞ」

机に広がった書類をまとめながら、長谷部が見習いに苦言を言う。そんな様子を腕を組みながらニヤニヤしつつ、鶴丸は茶化している。

そんな時、新たなメンバーが顔を出した。

「おう、朝から集まってやがんな」

「おはようございます」

和泉守兼定が長い髪をそのまま流しており、なぜかいつも羽織っている浅葱色の羽織りがない状態で、相方の堀川国広とやってきた。

「おはよ。和泉守は昨日出陣だったんでしょ？早くない？」

「あー…まあ、ちよつと今回は特別だな」

「特別って…女の子の刀剣の話？」

安定の疑問に首を縦に振った和泉守は、起きれる気がなくて国広に引つ張られてきたとあくびをしながら眠たそうに告げた。

「もう、兼さんったら報告の順番が最後だからつてずつと寝てるんだもん」

主さんは寝ないでやつてるんだから、協力しなくちゃ！と堀川がいえば、「へいへい」とけだるそうに返事を返す。

相変わらずお世話係やつてるなあと清光は口にしないで思う。

「それで、和泉守の報告で最後になるんだが？」

シキが声を発すればそれまでのんびりとした空気が引き締まり、眠そうにしていた和泉守もすつと表情をただした。

どさつと腰を下ろした和泉守。邪魔にならないように、清光や安定、堀川はその場を後にした。

なぜか、鶴丸はひらひらと手を振って、部屋の柱に背を預けたまま見送ってきた。

それを不思議に思いながら、堀川はやることがあるとそのまま別れ、2人はとりあえず朝食でも食へに行くかと食堂へ足を向けた時だった。

「2人とも、まってまってー」

声をかけたのは見習いである。

ぱたぱたとかけてきた彼女は清光たちに追いつくと口を開いた。

「2人とも、このあと時間ある？」

「とくに用事はないよ」

「朝食行こうってなつてたくらいでまだ暇してるけどー」

「よかったーなら、ちよつと噂の美少女のところに一緒に行かない？」

「は？」

「え？」

きよとんとした彼らを見て、内緒話をするように声を潜める見習い。

それに倣い、廊下の隅へと3人で寄っていく。

「実は昨日のブラック本丸で救出した子がその美少女なのね、結構今回は悲惨な現場だったらしくて…」

「保護できたのは、その刀一人だけ？」

「そう、シキさんが言うには審神者らしい人が折れた鶴丸国永で自殺したみたいで…その部屋に全身縛られた状態だったのがその美少女だったみたい…」

部屋の中にもいっぱいの鶴丸があつたらしいんだけど、全部折れちやつてたんだつて。

そんな話を聞いて、ああだから鶴丸が報告と一緒に聞いても咎められなかったのかと頭の片隅で思う。

「ていうか、そもそも救出できたその美少女ってのはだれなのさ？」

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

「そういえば聞いてない」

「すつごく綺麗な真つ白な髪の毛の『鶴丸国永』ちゃん！」

ほんつと美人なんだよ！ 儂い系リアル美少女ってのはじめてみた！ と、興奮しながら話す見習いをみながら、どうする？ と安定が視線を寄越す。

この短時間で何度「鶴丸」の名前がでたのやら。

そう思いながらも、好奇心は押しえられないので、結局は行くと見習いのあとについていくのだった。

新たな仲間？（続）

昨日はおしゃべりまでできなかつたから、お話できたら嬉しいなーと、へらつと笑う見習いに、さてできるもんかなと心の中でつぶやく。いろいろな付喪神となつた彼らを迎えてきたからこそ、そんなに簡単なことではないだろうと清光は考えていた。

そうとは知らず、安定は見習いに「女の子なら見習いと一番に仲良くなるんじゃない？」なんて言ってる。

見習い本人もあまりブラック本丸等から来た、訳あり刀剣と会う機会がないので気楽に考えていそうだ。

（なんもなければいいけどねー…）

これがフラグつてやつか、なんて思つて一つため息をついた。

その鶴丸国永がいるという部屋に近づいたところで、長身の男性の姿が見えた。

「あれ、燭台切さん？おはよー」

「燭台切も鶴丸に会いに来たの？」

黒いジャージ姿の彼が、部屋から少し離れた場所にいたが、少し様子がおかしい気がした。

「やあ、おはよう。朝起きて知らない場所じゃ心細いと思つて来たんだけどね」

「……やっぱ、なんかありそうなの？」

清光がそつと声をかけると、どうだろうと困つた笑みを浮かべて首を傾げられた。

「やっぱり困惑…は、してたのかな。こっちの鶴さんより繊細そうなのは確かだね」

「まあ、あの鶴丸は別格っしょー」

「女の子で、あの鶴丸と一緒にだつたら、いやだなー」

散々な言われようである。

噂のブラック本丸から来た黒い姿の鶴丸国永は、普通の鶴丸よりクールなようで腹黒い。

あんまりいたずらには行わないが、話をややこしくする天才である。

最近はおとなしくなり、刀剣同士の乱闘も減ったが、最初のころを知っている清光や光忠は少し遠い目をした。

見習いや安定も出合い頭でいろいろあったことを思いだし、苦虫を噛み潰したように顔をゆがめた。

そんな時だった、見習いが光忠の向こうを見つめて、カチリと固まった。

「……………」(見習い)

「……………」(鶴丸)

そして、じりつと鶴丸に近づくと見習い。その目は捕獲しようとしている肉食獣だ。

白い長髪の鶴丸は開けた襖からこちらを様子見しているように見える。

そしておびえている。確実に、この、見習いに！

「なにしてるの、みーなーらーいー」

「いたっ！」

べしつと見習いの頭をはたいてジト目で見習いを諫めた清光。

「ちよつ、なにすんのー?!」

「こつちのセリフー。ほら、向こうがおびえてるじゃん」

まったくとため息をつく、興味津々の安定が後ろからひよっこりとのぞき込んできた。

「わあ、本当に女の子なんだね！」

「ちよつとー、安定も驚かさないでよー？」

「そんなことしないって。せつかくなんだし仲良くしたいじゃん」

「…つていつでも鶴丸は固まりっぱなしなんだけど」

こつちを見たまま身動きしない鶴丸に困ったように声をかける。

「あ、ごめんねー、自己紹介したいんだけど、声かけて大丈夫？」

「私も私も！うわー、めつちや美少女！仲良くしたいっなでなでしたいー！」

「はい、おちつけー」

今度は後頭部ではなく、おでこをはたいてやる。

そんな様子に、まあまあと光忠が仲裁に入りつつ鶴丸へ優し気に笑

顔を向けた。

「この本丸のメンバーだよ、もう出てくれるかな？」

「……………」

おいでおいでと手で招く光忠に、きよろきよると周囲を確認し、無表情のようなこわばった表情の彼女がこちらに近づいてきた。

警戒しているのか、光忠の後ろにひっそり隠れるように。

「あれ、鶴さん？」

「ほらー、見習いが怖がらせるからあ」

「えっ！私なの?!ご、ごめんね、鶴丸ちゃん、怖くないよー、おいでおいでっ」

「それ、逆効果じゃない？」

見習いが大げさにハートを乱舞させながらおいでーといっても、鶴丸は俯いて目も合わない。

ぎゅっと胸に抱きしめた刀を握りしめるのみだ。

「鶴さん、だいじょうぶ？」

そつと伸ばされた光忠の手が見えたのだろう。

ふと視線をあげた、瞳。

とろりとしたはちみつのような、透き通った琥珀の金色。

そこに映るのは“怯え”だった。

「……………っひ…」

小さく悲鳴を上げた彼女は、あつという間に縁側を降り庭へ走り出してしまった。

「えー待って鶴さん！」

「ど、どうしようっ」

「とにかく追いかけてなくちゃ見失う!!」

「いこう!!」

慌てて追いかけるも、彼女は早かった。

あつという間に桜の木々に隠れたと思ったら見えなくなってしまうのだ。

「ちよ、手分けして探すよー！」

清光が声をかけて4人は走り出す。

何が怖かったのだろうか…見つけたらどうすれば…

思うことはそれぞれ異なるが、一致していることはひとつ。

「心配」だった。安心させてあげたい、ただそれだけだ。

あの金色の瞳が、頭から離れない。

探せばすぐだった。

彼女は枝垂桜に隠れてしまうように、縮こまって刀を抱きしめていた。

この本丸の庭で一番の大きさである大木の根元に座り込んでいた。

「鶴さん！」

「見つけた、ちよつと大丈夫？」

光忠と同時に清光も声をかける。

先ほどは合わなかった視線が合った気がした。

はつとして、探しているであろう残りの2人を大声で呼ぶことにする。

そんなに時間はたっていないので、付近にいるだろうと考えて。

「見習いー、安定あ、こつちにいた！」

その考えは正しかったようだ。

少し離れたところから、たたと走ってくる安定と、ぱたぱたとした少女が両腕をこちらに向けて走ってきた。

「ほんと?!よかったっ」

「つるまるちゃーんー!よかったよお」

鶴丸のところにとどり着いて、視線でどうするかアイコンタクトする。

先ほどは光忠が声をかけたが怯えがはしったことは見て取れたので、同性として見習いがおずおずと鶴丸に近づいで声をかけた。

「えつと、近づいても大丈夫かな？」

普段キャンキャンうるさい見習いにしては、静かな声だ。

なんだろう、デジャブを感じる。

そう、五虎退の小虎にそうつと近づいていく、あれだ。

いまだに触らせてもらえない小虎にいつもやってる、こわくないよーの声色と一緒なのだ。

(鶴丸のこと、子猫かなにかに見えてるんじゃないの、これ。)

そんなこと思いながら様子をみていると、小さく大丈夫という声が聞こえた。

ああ、これは確かに子猫の鳴き声みたいだ。

「にげて、ごめんなさい…わたし…」、こわくて」

懸命に思いを伝えようとしてくれる鶴丸に、見習いは普段とは異なり視線を合わせるようにしやがみこんだ。

「…うん、そうだよ。いきなりはびっくりさせちゃったよね、ごめんね」

そういって、鶴丸の頭を撫でる。

髪をすき、落ち着かせるように。

気持ちが伝わったのか、鶴丸は先ほどの怯えを小さくさせている。

大丈夫そうだ。よかった。

この場にいるみんながそう感じた。

「わ、わたしは…鶴丸、国永…です」

そつと、ちいさく名乗られた名前に、ほつとしながら見習いが笑った。

「ふふつ、よろしくね。わたしはこの本丸で審神者の見習いしているの」

なごんでいる見習いを見ながら、清光は横に並んでいる相方を横目で見ると、向こうもこちらを見てきた。

(とりあえず、一段落?)

(だね。)

笑みを浮かべながら、自己紹介の続きは屋敷に戻ってからだよと光忠が発言して、5人で満開の桜の下を歩くのだった。

やっと自己紹介できました

一行はもといた廊下まで戻ってきた。

裸足で庭を駆けてしまった鶴丸の為に、濡れタオルを用意すると去っていった光忠を待つ間、鶴丸と交流を深めようとまずは自己紹介から行ってみる。

「えーと、まずこの黒猫みたいな子が加州清光くんで、わんこみたいな子が大和守安定くんね」

ふたりとも系統違うけどかわいいでしょー、と気軽に言う見習いのため息が出た。

「ちよつとー、黒猫ってどうなのさ…」

「僕なんてわんこだよ？どこが？」

お互いを見つめ、いや間違ってるのか？と実はお互いそう思ったのは内緒だ。

じゃないと喧嘩必須である。

「えつと、見習いさん…の名前…は、ないの？」

不思議そうに首をかしげる鶴丸に、見習いはへらっと笑った。

「そーだねえ。審神者名が本来はあるんだけど、まだわたしは無いんだー」

「鶴丸も好きに呼べばいいんじゃない？見習いとか、姪っ子とか」

「姪っ子？」

審神者名早く欲しいなーとかいっている見習いを横目に、清光は説明した。

この本丸の主である審神者シキの姪にあたるのが、この見習いである。

「そういえば、見習い、とかって制度は知ってるの？」

ふと安定が問えば、鶴丸は首を横に振った。

「審神者…は分かる。あるじのこと。…見習いはなにを見習うの？」

「あ、ごめんね。上位本丸にしか来ないから知らないよね」

聞けば、「見習い」という存在を受け入れる本丸にはある一定の条件があるとのこと。

そして、見習いは審神者になる前に希望した候補生が大先輩の本丸に弟子入りして業務の流れや刀剣について勉強する機会を得るものなのだそうだ。

「わたしの場合は親族に上位本丸のシキさんがいたからラッキーだったよ〜」

「見習いになるのに試験が必要なんだっけ？」

「試験…というか、適性検査とか面接とかかな。昔、見習いが本丸を乗っ取ろうとしたことがあったみたいで…」

この制度もいろいろ変更加えられてるんだよねーと気軽に話す見習いを見ながら、鶴丸は前のわたしだった頃を思い出していた。

なんか、就職活動みたい、と。

「おまたせ」

颯爽と現れた光忠は、縁側で座って話を聞いていた鶴丸の足元に動き、その素足をぬぐう。

「みっちゃんっ！イケメン!!!」

びしりと固まった鶴丸とは違い、見習いはテンションが上がっていた。

「やっぱり、小枝か何かふんじやったのかな、少し怪我してるみたいだ…」

「っえ！だいじょうぶ？鶴丸ちゃん」

「う、ん。痛くない…から…」

心の中で、ひえ…というんな意味で混乱している鶴丸の言葉は、言葉が足りず、光忠たちは嫌な想像が広がっていた。

まさか…痛みを感じないのか？…なんてところまで行って顔が歪みそうになっているのを必死に我慢していることを鶴丸はまったくもって気づけなかった。

「あの…？」

「…な、なんでもないよ、血は滲むくらいだから、主に手入れをお願いしようか」

「そうだね！とりあえずシキさんのところに行こう！そうしよう！」

「え…手入れ？…しなくても大丈夫、だよ？」

(刀はちゃんと握っていたし…)

すつぽりと自分の傷Ⅱ刀についた傷ということ忘れて発言するくらいには、鶴丸は気が動転していたようだ。

まさか跪いて自分の汚れた足をイケメンに拭かれるなんて誰が想像したことやら。

原因は光忠にあり。だが、その本人も周りもその戸惑う鶴丸を見て、さらに想像が加速する。

この本丸では少しの軽傷でも手入れをしてもらえるが、鶴丸のいたブラック本丸では違ったのではないか…。

まさか、まさか…重症で放置とかないよな…なんて。

まあ実際のところ、鶴丸は気づいたら縛られていたくらいで怪我をする暇なく保護されたため詳細は不明である。

といっても、手首などに残っている縄の跡は怪我という概念に入っていないということは想像にたやすかったが。

手入れを断る鶴丸に「するの！」と強引に、かつ、大胆に行動に移したのは意外にも加州清光だった。

ひよいつと座っていた鶴丸をいとも簡単にお姫様抱っこだ。

鶴丸の頭はショートしている。こうかはばつぐんだ。

そんな鶴丸に、加州は主のいる部屋に向って歩を進める。

「うちの主は怪我の放置を許すような、そんな人間じゃない」

赤い真剣な瞳を廊下の先に向けてむすつとしながら歩んでいく清光に、安定や見習い、光忠は顔を見合わせくすりと笑ってしまった。

清光を追いかけながらそれぞれ肯定の言葉を発する。

「確かに、シキさんはかすり傷でもなんでも手入れするよね」

「この間紙で手を切っただけでも、手入れ部屋直行だったよー」

「どちらにせよ、挨拶とかこれからのことは手入れしてからになりそうだね」

ぱちぱちと金色の目が瞬いた。

おとなしく腕におさまる鶴丸に、清光はにっこり笑う。

「と、いうことだから、大人しくしててよねー」

清光の腕から見える景色は、優しい笑顔の4人の笑顔。温かい雰

困気。

(ああ、いいな)

思ってしまう。

(仲間に入れてほしいな)

そんな、凶々しい願いがふと浮かび、もみ消した。

鶴丸の内心は表情には出なく、たださみしそうにかすかに瞳を細めて。

そんな彼女に清光はどきりとしつつ、気にしないように進むのだった。

白と黒のはじめまして

へし切長谷部という刀は、大差あれど主命を大事にする主の為に
んでもやろうとする刀剣である。

といっても、この本丸にいる長谷部は多少冷めている部分があるの
は否めない。

根本は同じであろうとも、主との関係性は本丸によりけりである。

「して、主はあの刀剣をどのようにするおつもりですか？」

「ん〜：少し悩んでる、と言ったらどうする？」

「質問を質問で返さないください」

ああ、頭が痛いとおざとらしくため息をこぼした長谷部に対して、
シキは慣れたように口角をあげながら机に向かっている。

審神者の仕事は基本的にデジタル化（3D化やらテクノロジー満載
なのだが）していようが、いつの世も紙媒体というものは残り続ける
ものである。

質の良い紙の手ざわりを感じながら書面を確認する。

片手で紙を確認しつつ、宙に浮かぶいくつかの画面をスクロールし
ていく。

時折人差し指で入力部分を触り、勝手に入力が進む画面——これ
は、脳で文字を構成し、人差し指から文字入力を流し込む技術であり、
審神者であれば必須となるコミュニケーション能力の一つである。
もちろん見習いはこの方法はできないところから始めるので、練習か
ら始めるのだが——今、シキが行っている作業は“情報収集”であ
る。

審神者もある意味政府の役人と同じ公務員のようなものである。

そのため、情報収集や本丸の管理も含め戦略や報告なども審神者と
しては立派な仕事の一つである。

今回は上から依頼がありブラック本丸へ乗り込んだシキだったが、
一振りのみの保護となった。

それも、聞いたことのない女性の鶴丸国永で、しかも状況が状況
だった。

手入れを行っても消えない縄の跡。混沌といえる気配。堕ちているわけではないのにどこか気配が乱れている状態。

長いこと審神者を行っているシキでも聞いたことのない状態であった。

そういつたわけで似た事象がないか、事例はないかと情報収集を行っているのだ。

そんな主の様子に、長谷部も手当時の様子を知っていることもあり、主の行動の先が読めないでいた。

現状、この本丸には「鶴丸国永」は存在する。

それは別のブラック本丸から来た黒い亜種ではあるが。

長谷部は主の後ろに座しているが、当たり前のように自分の背後の柱に背を預けながらにやにやしている鶴丸に何も思わないなんてことはない。

確実に今回の騒動が楽しくてしょうがないのだろうと予想しているが、二振り目の亜種を引き入れるのかは主の意思次第である。

「長谷部は、あの俺を受け入れちまっつていいのかい？」

「…それはどういう意味で聞いているんだ」

「別に他意はないさ。変わり種であることには変わりないだろう？だが、ここまで政府から指示がないことも事実だ」

「俺は…足手まといにならないのなら構わん」

主の意思を一番に支持するのは当たり前だが。と、付け足して静かに話す長谷部に鶴丸は目を細めながらちらりと長谷部の背から「主」のシキへ視線を移した。

「と言っているが、実際問題鶴丸が増えることには賛成なのか？主」

「そうだな、最終的には本人次第…だが、解決しなくちゃいけないことがあることも確かだ」

畳に胡坐をかき、片足を立てた姿のシキは少し乱れた着物も気にせずそう言った。

そしてちらりと後ろの鶴丸へ振り返りその瞳を見つめる。

「あれを、お前は どう思っているんだ？」

「そうだなあ、かわいい化け物といったところか」

黒いフードを被った彼は、その内側から覗く金色を弓なりに細めて
楽し気に笑った。

「かわいい…ねえ。好意的ではあるんだな」

「…つくく、ああ、気分が悪くなるもんでもないのは確かだな、良い驚
きをもらっていると思っているさ」

「それで？」と鶴丸はシキに問うた。

何か進展はあったかと。

「お手上げだな。事例もなにもあったもんじゃねえ」

「では、政府の判断を待ちますか？」

「いや…今回は…」

そこまで言っただけこちらに向かってくる足音に気付いた。

扉は開け放っているため、話し声も含め少しずつ近づいていること
から、この部屋に向ってきているようだ。

「おっと、良いタイミングだな、この先は本人含めて話した方がよさそ
うだ」

腕を組んで笑っている鶴丸は、ん？と首を傾げた。

それにシキはどうしたと長谷部と共に鶴丸を見上げた。

「ああ、いや…どうやら話をする前に手入れが先かもしれんなあと」
「は？」

眉間のしわが深くなつたのが本人であるシキ自身にも分かったが、
また誰かなんかやらかしたのかとぐっと力を入れてしまった。

そんなシキの表情に長谷部は苦笑いが込み上げてしまうのは仕方
ないだろう。

この過保護気味な主としては怪我はかすり傷一つでも怪我のうち
に入ってしまうのだから。

「シキさん、連れてきたよー」

「おはよう、主」

「燭台切も一緒だったか」

「やあ、長谷部くん、おはよう」

そこに現れた団体には、加州と大和守だけでなく、なぜか加州の腕
の中にいる鶴丸と後ろから背の高い眼帯をしている燭台切光忠も居

た。

「なんだ、光坊も一緒か」

「うん、いろいろあつてね、そのまま一緒についてきちやった」

「それで…へえ」

今まで背を預けていた柱から離れ、黒い姿の鶴丸は加州の腕の中の「白い」鶴丸へ近づいた。

自分よりも長い白い髪をするりと掬い上げる。

「きみが…わかるだろ？俺が何か」

「……つ、るまる」

「ああ正解だ。まさか俺がこんなお姫様みたいな形になるとは驚いたな」

不思議そうに白と黒が会話をする。

二人を並べてみると、確かに相違が多い。

白い鶴丸はやはり女性的で線が細いだけでなく、どこか華奢な印象を受ける。

そして特徴的として長髪であり、瞳はとろりとした蜂蜜色だ。

一方黒い鶴丸は黒い羽織以外は通常の鶴丸と同じ風貌をしている。

しかしやはり細いが骨格は男性で白い髪を掬い上げた手は骨ばっていた。

だがそれ以上に違いをあげるとするとその瞳である。

こちらは猫のような好奇心という色を浮かべる金色だ。

瞳だけでだいぶ印象が変わるのだなど、その二人を眺めた清光は、腕の中の彼女がおびえていないことに気付いた。

(普通、この鶴丸の方が怖くない?)

不思議そうに黒い鶴丸を見返す彼女は不自然なくらい緊張や怯えが見えない。

先ほどまでの怯えはどこにいったのかといった様子だ。

どこか納得いかないような気がするが、ふうん、とにんまり笑う目の前の鶴丸に、むすつとしても仕方ないと声をかけた。

「ちよつと鶴丸、どいてー。主、こつちの白い鶴丸怪我しちやっただ、手入れするでしょ?」

このまま連れて行っちゃって良い？と首を傾げた加州に、ああと頷いて立ち上がるシキに首を傾げた。

「あれ、聞かないの？」

「ああ…何があったかは気になるが、それは後でだ。ああそうだ、見習いはついだから手入れ見ていけ。あとは自由にして良い」

そう簡単に指示を出したシキに、燭台切や長谷部は、

「なら、僕は先に食事をすませちゃうね。確か今日出陣予定だったし」「なら俺も行こう、主、失礼します」

と言う。

燭台切は去り際に、またねと白い鶴丸に手を振って。

「安定はついてくるんでしょ？」

「うん。ご飯まだでしょ？みんなで食べようかなって」

「じゃ、いこっか。」

鶴丸は手当終わったら戻ってくるというシキに、ならここで待つと部屋の隅に胡坐をかいた。

部屋から去っていく面々、残った鶴丸は頭の後ろで手を組みながら、木造の天井を見上げた。

黒いフードがその瞳に影を落とす。

「…ありゃあ根深いな…、つく、やっぱりここに残って正解だった」

薄い唇が小さくつぶやきをこぼし、こらえられないというように喉で笑う。

あの“俺達”と混ざった小さい光に、言葉にならない感情を抱きながら。

まずは鶴丸とあんたの名前な。

あの後、手入れ部屋にてなぜか持っていた刀をぼんぼんされた。そうしたら、なぜか足の裏の傷があつという間にきれいになった。どういう構造をしているのか…。

いや、自分の中にいる他の鶴丸くん達がそういうものだと教えてくれているから、そういうものなんだろうけど。

無表情のまま、やっぱり不思議なその謎現象を見ていた自分だが、ここにいる人たちは何も疑問を持っていないようだった。

(これは、黙っているのが正かな。)

そう結論付けても顔に出ていた模様。

無表情とは縁がないようだ。

なんだか酷くショックを受けている見習いさんに、厳つい顔が眉間のしわでさらに迫力を増した審神者（イケオジ）。

難しそうな顔で互いの顔を見合わせる赤と青の青年二人組。加州くんと大和守くんだけ。

しかし、傷が消えても何故か縄の跡が消えないのは気味が悪い。

無意識に手首の縄の跡を擦っていたようで、見習いさんが悲しげな顔をして手を握ってきた。

見れば縄の跡の残った手首が摩擦で別の意味で赤くなっていた。

はくはくと何か言いたげに、でも何を言えばよいのかわからないといった見習いさん。

この少女にそんな悲しそうな顔をしてほしくない。

私は、コミュ力が高くなくても普通におしゃべりできた、ハズ！

「…へいき、だいじょうぶ、痛くないよ」

なぜこの口は単語しか出てこなかったのか!!

ごまかすように笑みを浮かべたけど、引きつっていたのかな。

こんな美少女の笑みなら多少可愛く笑えたと信じたいが、見習いさんは視線をそらして俯いてしまった。

え、そんなに気持ち悪い笑顔だった…？そっちの方がショックなん

だが。

「おい、ひとまず俺の部屋に移動するぞ」

「…う、うん」

ほんと見習いさんの頭を叩いた審神者はため息交じりにそう言った。

「ああ、戻ってきたか…なんかあつたのかい？」

元の審神者さんの部屋に戻ると黒い彼、鶴丸国永が壁というか柱に背を預けて座っていた。

手入れ部屋で握られた見習いさんの手はすぐに外され、ぞろぞろと審神者を先頭に戻ってきたのだ。

どことなくどんより（主に見習いさん？）している雰囲気いち早く気づいた彼がそう声をかけてきた。

視線の先はなぜか私だ。

同じ鶴丸だから…かな。それとも主犯と疑われたのか…？

なんとといえばよいのかわからず首を傾げていたら、審神者が何か見習いさんに話をしていたようだ。

急に見習いさんが自分の頬を両手でたたいた。

そらあもう良い音がなりました。

「ごめん！なんでもない！！気にしないで」

ふんすと気合を入れた彼女にぱちくりと瞬いた後、鶴丸は笑い声をあげた。

「ははっ、頼もしいねえ」

「だてにシキさんに習ってないからね！」

そんな会話を眺めつつ、それぞれが好きに部屋の中に座っていく。加州くんや大和守くんは外に一番近い場所、逆に審神者は一枚板でできた立派なローテーブルの向こう側。

見習いさんも審神者の横へ。そして机を挟んで私も畳の上に座った。

「さて、いろいろと聞きたいことがあるんだが、まず俺達が把握してい

る“あの”本丸の話をするか」

そうして語りだした審神者、シキさんいわく。

私がいた本丸は所謂ブラック審神者疑いのあつた人物のいる場所だった。

その審神者（あの自殺したやつだ）は、数か月前までは普通に日常の業務や定期連絡も欠かさない人物だったそうだ。なのにある日、突然連絡が途絶え、こんのすけとも連絡が取れない。（こんのすけとは、各本丸に駐在する管狐のことだそうだ）

これはおかしいとその審神者の担当者は本丸を調べた結果、データ上の刀情報を入力。その内容に担当は驚いたらしい。なぜなら、大量の鶴丸国永を鍛刀している傍ら、鶴丸以外の刀はすべて破壊されていたとのこと。これはいよいよおかしいと、審神者の捕縛と刀剣の保護をシキさんに依頼した。

…ということだった。

「…あー…、ひとまずあんたのことは鶴と呼んで良いか」

そう口にしたシキさんは黒い鶴丸と、私をどう呼べばよいかを少し試算してそう聞いてきた。

「…ん、私も鶴丸国永だから、それで良い…」

ちらりと黒い鶴丸を横目に眺めたら、にやつと笑われた。

「なら、鶴、俺のことはなんてよんでくれるんだ？」

どこかわくわくした様子の彼に、そう問われた。

シキさんとかは「ちよつと黙ってる」とか言ってるが、彼は大事なことじゃないかと笑っている。

その笑みは、どこか子供のような、でも面白がっている悪い笑みにも見える。

なまじ顔が整っている為、どんな表情でもイケメンとしか思わないが、さてなんと呼べばこいつは気が済むのやら。

ねえ、どう思う？と自分の内側のたくさんの鶴丸達に問いかけても返答はなし。

雰囲気的には好きにしたらいいんじゃないか…といったところか。

「えつと…鶴丸さん、じゃだめなの」

「そいつじゃ面白みがないだろ？それとも俺が呼び名を変えるか、お嬢とか姫さんとか」

「…自分を姫とか…やだ」

「ならお嬢だな、んでお嬢は俺をなんて呼んでくれるんだ？」

「私が鶴なら、君は鶴丸さんで差別化できていると思う」

それとも「黒鶴」とでも呼ぼうかと適当に提案したら、若干気に入ららしい。

が、シキさんが「お前は鶴丸、あんたは鶴で決定だ、これ以上名前が増えるのはめんどくせえ」とのまさに鶴の一声でこの応酬は終わりをさせるのだった。

鶴丸だからわかること

さて、と一区切りをつけてから審神者（シキさん）がこちらへ視線をくれる。

「話せる分だけでいい、あの本丸で鶴がどう過ごしていたか教えてくれないか」

「あの、本丸で…」

どう過ごしてきた…か。

さて、どう答えるのが良いのだろうか。

わたしが分かることは、本当に少しだ。

先ほどの話からすると、鶴丸国永が大量に鍛刀され、それ以外は破壊されていた。つまり本当に「鶴丸国永」以外の刀剣がない状況だったとして。

あの暗い部屋に散らばった折れた鶴丸国永達が全てだったのか、ただ他に保管されていたのかもわからない。

それでも確かに「わたし」の中には大勢の鶴丸国永の力が入っている…というか混ざっている。こちらを黒フードを被った状態で眺めている黒鶴（面倒なのでもう、わたしはこう呼ぼうかな）は、わたしの状況を把握している…ような気がする。

どう表現すれば良いのだろう。何を、話せば良いのだろう。

「わたし」のことは…話すのはどうなんだろう、既にどんな存在だったかがわからず、「わたし」という鶴丸国永である存在と認識してしまっただから、どんどん記憶が薄れていく。

なのに、「鶴丸国永」である記憶も何もないのだ。

自分が消えていく、塗りつぶされていく、過去が消えてつかめない。こんな状況の「わたし」は、わたしという自我も、いつかは…消えてしまいそう。

ぞつと嫌な想像をしまして、少し呼吸が乱れる。

込み上げるのは恐怖？それとも…

「鶴、大丈夫か」

気づいたら目の前のテーブルの年輪をぼんやりと眺めていた。

シキさんの声にハツととして正面の彼を見上げた。

そこには、強面だが気遣いを見せる優しい色の瞳。

重い口を開け、かすれた声を出す。

「わたし、は、あの部屋しかしらない。あの暗いへや、鶴丸がたくさんいた、それが混ざったけど」わたしは何故鶴丸なのか分からなくて、何が起こっていたのか分からなくて…でも…」

ぐらりと視界が歪む気がする。

「でも、あの、さ…にわ…あの、目の前で…分からない、けど、いきなり首、折れた」わたし、違う、折れた鶴丸で首を…」

あの光景が目の前に広がる。

黒いあのどろりとした視線、言葉、ぱつと散った赤、霧のように口から洩れた赤、首から飛び散る赤、赤、あか。

「なにも、わたし、なにもできなくて、しなくて、思えなくて…」

「…鶴、鶴もういい、もう」

「…ちがう、わたしは思わなかった、けど、鶴丸は違ってた…わらってた?…今も、わらってる?…違う、安心して、そう、違う、そうじゃない…わたし、わたしは、違う、”おれ”は…」

まるで壊れたテープのように、自問自答のように肯定の後の否定、否定に対しての否定、それを繰り返す彼女の姿は異常であり、黒鶴からすれば正常だった。

おそらくこの部屋にいる誰よりも、彼女のことを理解しているのは黒いフードの下から猫の目のような金色の目を細めている鶴丸だろう。そしておおよそではあるが、いま彼女に起こっている状況を把握できているのも彼だけといえるかもしれない。

もしかしたら、シキも多少想像で補って答えにたどり着く可能性もあるが、ぽつりぽつりと零される言葉に静止をかけているところを見ると、まだ彼女の本質に気付いていなさそうだ。

見習いは壊れたように眩く様子のおかしい彼女に青ざめて体をこわばらせている。

そう、いま彼女「鶴丸国永」からはじわりじわりと神気がにじみ出

ている。

それも一振りが持つべきではないほどの深みのある冷たさの神気だ。

加州や大和守は、この本丸で鍛刀された刀故、何が起こっているのかわからず、手が出せずにいる。

ただ神気がまだ清いだけマシなのだが、それさえ「わかっている」ものはいらぬやう。

(…しかし、これ以上はまずいかもしれんなあ…)

背を預けていた柱から離れ、彼女に近づくと。

「お嬢」そう言つて正座をしたままぼんやりしている彼女の顎をこちらへひく。

座っている彼女の横に跪き、こちらを見上げる彼女の表情は白く、揺れる瞳は迷子の子供のようだ。こつりと互いのおでこを合わせ視線を合わせる。

「お嬢、いま俺はお嬢に話しかけている、わかるな」

「……黒鶴」

「そうだ、鶴丸」じゃない、俺だ…わかるな、お嬢」

「……ああ、そっか…わたし…でも」

「いい、まだお嬢がそれを知らなくていいんだ、ただ、それにはしばらく触れない方が良く」

「でも……」

「それより、楽しいことを考える方が良くってもんだ」

「…そう、そうだね、うん」

わかったと小さくつぶやく彼女は、どこか安心したように静かに瞬きすると、漏れだす神気も気づけばなくなり、先ほどまでのどこか儂げな少女へと戻った。

「…ありがと」

「別に礼を言われることはやってないぜ？これ以上は朝食に遅れそうだとおもったただけだ」

「そういうことにしとく…」

黒鶴はにやりと、鶴はくすりと小さくわらって額を離した。

その姿ははたから見れば、見えない絆を感じるような、そんな雰囲気醸し出す。

そんな空気を換えるように、加州が声をあげた。

「あるじー、そろそろ朝食の時間終わっちゃうし、先に済ませてきちやって良い？」

「そうだな…鶴、すまん、加州達と朝飯食ってこい」

「…わかった、えと、黒鶴もくるの？」

シキの「いや、鶴丸は——」という声を遮るように黒鶴は声を出した。

「ああ、共に行こうか、俺もまだ食ってないからなあ」

「おい鶴丸」

遮られたシキは鶴丸に異を唱えるように声をあげるが、黒い彼は動じず鶴の手を取って立ち上がらせた。

そのまま背を押しながら部屋から出ていきがてら、ちらりと審神者に振り返った。

「悪いな主、今は時じゃないから攫っていくぜ」

「…めずらしいな、お前がそこまで構うのは」

「…俺の楽しみを取り上げてくれるなよ」

驚きがなくちや味気ないだろう？彼女ののような驚きに満ちた存在（やつ）に会えるのは稀だからな。

そう、にっと笑った彼の本音は何なのだろうか。

刀剣達が部屋から立ち去り、残されたのは人間である審神者と見習いのみ。

シキは大きいため息をついて、扱いづらい黒い鶴丸を思い浮かべた。

彼のいた本丸もいろいろあったが、なぜか彼からこの本丸にいることを志願してきたと聞いている。

政府を経由して来た彼は、シキのことを「主」と呼びはしているが、どこまでいうことを聞くのかは謎である。

そこに不安定な女性姿の鶴丸が現れた。

この先なにかがあるかは不明だが、「楽しみ」と表現されたからには、

なにかまだあるのだろう。自分の想像以上の何かが。

ちらつと姪の姿へ視線を向ければ、どうすれば良いのかという不安が読み取れる見習いの姿。

まずはここからか…と遠い目をしながら、深く、深く息を吐きだした。

ひとまず、煙草でも吸うか。

鶴丸だからわかること（続）

審神者見習いとして、叔父の本丸へ住み始めてから、初めて「ブラツク本丸」という知識でだけ知った存在と関わった。あれは、そう、目の前にいる黒いフードを被った亜種と呼ばれる刀剣「鶴丸国永」との出会いであった。

詳細はまだ早いと教えてもらえなかった。

でも、この鶴丸と目が合うと他の刀剣と違う何かを感じて、毎回ドキリと心臓が鳴る。

それは恐怖なのか、畏れなのか、見透かされている感じでしょうか。も異常な何かが目の前にいるように感じてしまっただけでしょうか。なくなってしまう。

最近はどうも通常の鶴丸国永と似た気配に戻ってきているのと、少し安心していた。

だが、目の前の彼は初めて会った頃の彼と一緒に。異常な気配、触らぬ神に祟りなしとはこのことだと言いたい雰囲気。黒フードの向こうの瞳と目が合うと、ぎくりと体が無意識にこわばらせてしまう。

そんな彼と、彼女が同じ刀剣であるとは思えなくて。

彼女、鶴ちゃんはずごく綺麗な澄んだ気配とどこか守ってあげたくなる雰囲気があつて、ついさっきまで、そんな彼女に庇護欲を掻き立てられていたというのに…。

（なに、これ）

それは、シキさんが彼女に質問をしたことで突如として表面化した。

ブラツク本丸の刀剣は、様々な思いや感情を煮えたらせている為、扱いには十分に気を付けなければならない。

そう教えられてきたが彼女はただ怯えと不安が大半で。質問されてすぐはぼんやりとしながら、ぽつりぽつりと言葉が落ちてきた。だが、だんだんと様子がおかしくなる。

それを察し、ストップをシキさんがかけているが止まらない。

眩かれる言葉は次々と、肯定、否定、また肯定を繰り返す。

そして、一人称がわたしから“おれ”になった瞬間にぞわりとした寒さを感じる。

ああ、彼女から漏れ出した神気だと認識する前に、体は正直だった。息が止まるかと思った。

手先が冷たくこわばり、畏れを抱き、抑え込まれるように頭を下げてしまいたくなる。

だが体は動かない、ひゅつと息を吸うが空気が脳へいかない。頭が回らない。苦しい。

そんな時だった。

そんな彼女に近づくのは同じ名を持つ黒フードの彼。

顎を白く細い指ですくい、額をこつりと合わせるその様子は、神聖な儀式か何かのようだ。

何を囁いているのか、回らない頭では入ってこないが、少しずつ彼女からにじみ出ていた気配が元に戻っていく。

「……………」

浅く呼吸を繰り返す。

少しずつ絹の擦れる音、彼らの声が聞こえてくる。

「…ありがとう」

「別に礼を言われることはやってないぜ？これ以上は朝食に遅れそうだとおもったただけだ」

「そういうことにしとく…」

彼はにやりと笑い、それを見て鶴ちゃんも小さく笑みをこぼした。もう先ほどの気配は感じない。

この短時間で何か繋がりを作り上げた彼に少しの嫉妬感を覚えてしまうくらいには自分も、元の状態に戻ってきてはいるようだ。

その後、加州が朝食を食べに行くと言をあげ、それに頷く大和守。

そして、引き留めようとしたシキさんを尻目に鶴ちゃんを促して歩き去っていくその彼が振り返った。

「悪いな主、今は時じゃないから攫っていくぜ」

「…めずらしいな、お前がそこまで構うのは」

「…………俺の楽しみを取り上げてくれるなよ」

驚きがなくちや味気ないだろう？彼女のような驚きに満ちた存在（やつ）に会えるのは稀だからな。

そう、にっと笑った彼はどこか楽しそうに、だが、何か拒絶するようにならぬ。目を細めてから去っていった。

あれは、牽制？忠告だろうか？ともあれ、残されたのは人間二人、それにどこか安心してしまふのは審神者見習いとしてはダメなのだろうが、本音を言ってしまうえば。

（こわかった…）

ただこの一言だろう。

底が見えない暗闇をのぞき込んだかのように、確かに自分は畏れ、恐怖した。

そして…。「」したのだ。無意識的に。

（ああ、なんて…）

なんてひどいやつなんだろう。

さつきまで仲良くしよう、守ってあげようとしていたのに、それが上っ面だけのもの感じて恥ずかしくなる。

「…シキさん…わた、わたし…」

「落ち着け。そう感じんのも無理ないが、今は忘れちまえ」

胸元から徐に煙草を引つ張り出し、一息入れる叔父の姿。

白い煙が昇っていく。苦い香りとともにシキさんは呟いた。

「今回は確かに俺が悪いわな…」

何度もブラック本丸と接触してきた審神者ベテランの彼が言うのだ。

自分に気づけない何かがあったのかもしれないがわからない。

だが、決して触れてはいけない何かに触れようとしたようにも感じる。

「…シキさん、鶴ちゃんはこの後どうなるの？」

このまま、一緒にこの本丸で生活できるのか、それとも政府に引き渡すのか。

すう、と煙草を吸い上を向いて吐き出す彼は、どこか様になる。頭の隅で、このイケオジはワイルド系雑誌にでもでれる気がするなんて

ふざけたことを考えつつ眺めた。

しばらくの沈黙。そしてポツリと返される言葉に、そうか…とどこか納得して頷いた。

「あいつ次第だろうな…」

朝食を食べましょう

目の前を2人の赤と青の着物が歩く、その後ろを歩きながら右側に広がる大きな庭や、左側のいくつもの部屋を通り過ぎていく。外は春の陽気に包まれており、広々とした日本庭園。遠目でも何人か人の姿が見えたりしていた。

まだ1日しかたっていないのに、自分の現状の目まぐるしさに心が追い付けない。

そんな中でも人ってお腹がすいたりするんだなあと他人事のように感じていた。

今日は何を食べようか、みそ汁の具は何か、なんて会話が聞こる中、ぼんやりとそんなことを考えていた。

私は何をしていたんだっけ、どんどんと記憶がぼやける中らしくないなあとか「らしい」ってなんだろ…とか。不完全でもたくさん鶴丸国永と混ざったことにより、思いのほか自分の思い出の引き出しは開かなくなってしまうているようだ。

「どうした？」

黒鶴の声が耳元で聞こえた。

はっとして振り返ると、思いのほか顔の近くから覗きこまれていたようで、心臓がどきりと鳴る。

「…びっくりした…」

「そうかい？驚けるならまだ大丈夫だな」

「…：次は私が驚かせるから」

にやにやからかってくる彼に、むすつとしながらそう答えたが、さりと「できたらいいな」なんて返されてしまった。

そうこうしているうちに、人のざわめきが増え、それに伴い人の気配も増えてきた。

「ついたよ」

「この本丸は食堂みたいな感じなんだ」

足を止めた加州と大和守が振り返りそういう。

二人の間から見える部屋は広い部屋。その半分はテーブルとイスやソファといった洋風テイスト、もう半分は掘りごたつのようなお座敷のようになっていた。

奥にはカウンターキッチンのような場所もあったり、配膳を回収するような場所だったりと様々なものがある。

そして、そこかしこに様々な風体の刀剣達がグループになったり一人に散ったりしながら食事を楽しんでいるようだ。

(…いきなりこの人数の中入るのは…)

心の中で泣き言を呟きながら、一番近くにいる黒鶴の袖を引っ張った。

「怖いかい？」

「…怖くはないけど…えっと、圧倒されてる？」

「まあ、仕方ないか、慣れるまでは共にいればいい。なかなか面白いやつらが多いからな、すぐ慣れる」

じりじりと黒鶴の後ろに隠れようとする鶴を、逆に黒鶴は頭を撫でながら押し出していた。

「なんで押すの」

じとつと見れば、にやにやした(さすがに見慣れてきた)笑顔を浮かべてケロツと「その方がおもしろくなりそうだ」と言い放つ彼は優しくない。

加州達はそんな二人を苦笑いしながら「ほら、いくよー」と中に促した。

そんなやりとりは、もちろん中で食事をしていた彼らの視線を集めていた。

その理由はいくつかある。

噂話として昨日連れてきたという珍しい女性の姿の刀剣。

ブラックから来たというだけで注目の的のだが、そこに同じ刀剣である「あの」鶴丸国永が共にいることも目を引いた。2人がじやれている姿は、どこか兄妹のような姿をしておりいつもの鶴丸国永とは様子が違うことは一目瞭然で。

そんな中、いつもの粟田口集団に混じって食後のお茶を飲んでいた

乱藤四郎も部屋に入ってきたその一行を目にして目を輝かせていた。「ねえねえ、彼女だよ昨日言ってた子！」

「へえ、あの鶴丸とも仲良さそうだな…珍しい」

隣で同じくお茶を飲んでいた葉研藤四郎も興味深げに噂の彼女を眺めた。

白い髪が長く動きに合わせてふわふわと揺れている。全体的に線の細い以外は鶴丸国永と似た姿かたちをしているが、比較対象の鶴丸が横にいることでさらに儚さが増しているように見える。やはり女性ということもあるのか、一回り小さいようで、背もそんなに高くない。なぜか刀は片手で握ったままになっている。

まあブラツクから来たばかりで、食堂に来れる時点でそこまで酷い状態ではないのかと推測する。

(場合によっちゃ、部屋から出てこないこともあるからなあ…)

「やっぱ綺麗だよね、着飾ってみたい！」

「乱、あんまりはしやぎすぎちゃ駄目だよ？」

くすりと笑いながら長兄、一期一振がそうたしなめる。

それにわかっているよくと拗ねた返答をしながら、視線の先の一行がご飯を食べ終わったら声をかけようと計画を立てていた。

この本丸の食堂は、基本的に妖精さんに頼むことで配膳される。

基本的に材料となる野菜や魚、肉、その他調味料類に関しては宅配されるシステムになっており、とくに食事の用意等はお任せ。

まあ、一部料理に興味のある刀剣は、厨房の一部を利用して自分で好きに料理をすることもあるのだが。

定食からおやつまで、戦場に赴く刀剣をサポートするように至れり尽くせりである。

温かな緑茶が胃にじんわり染みわたる。

やっと一息付けた気がして、肩のこわばりが少し緩む。

食事はあまりとる気になれず、でもお腹は空いているようだったの

で、白い小さなおむすびとみそ汁を頼んでみた。

「おいしい、そんな少しで足りるのか？」

焼き魚定食のような和風な彼、黒鶴の茶碗には大盛りの白米が。

「…黒鶴のそれは、普通なの？…多くない？」

正面に座っている加州と大和守もそんなには多くない。

まあ、その二人と比べても自分の頼んだものは少ないと認識はしているが…再度横に座っている黒鶴の茶碗の米を見て自分の3倍？とか考えてしまった。

「まあ、鶴丸はもともと細いくせにたくさん食べてるよね〜」

「確かに。それにおやつも結構食べてるイメージ」

「甘いもんは別腹っていうだろ？それよりもう少し食べた方がよくないか？」

ほれ、と口元に持ってこられたのは黒鶴の箸が挟んでいたたくさん。

え、これ食べた方が良いの？

ちらりと黒鶴をチラ見したら、なんだかわくわくしているように見える。

ああ、これは善意なのかな〜と思い、目の前のそれをパクリと食べてみた。

「ちよ!!」

「えええ?!」

「どうだ、少しでも食べて動けるようにならんな」

「ん（ぽりぽり）」

なんだろう、ざわめきが大きくなった気がするが、それよりこのたくあん美味しかった。

塩おむすびを少し口に含み、お米の甘みと塩の塩梅にも、なんでもなんにおいしいのか不思議だ。

「まだ食べるか？」

「……………（悩む）」

どうしよう、黒鶴が私を誘惑してくる（たくあん…）。

そんなやりとりを正面に朝食を口にしながら、加州と大和守はなん

とも言えない表情をしていた。

「あれ…どう思う？清光…」

「あの鶴丸だし…からかってる？でも、悪気なさそうだしな…」

「だよねえ…というか楽しんでる？…触れない方が吉かな」

「でしよーね、さつさと食べちゃお」

小さな口で、小さなおむすびを口に運ぶ鶴に対して、横からちよいちよいたくあんやらゴマの和え物を口に運んでいる鶴丸はどこか楽しそうだ。

周りがぎよつとしているのもなんのその、その行為は鶴がもういらないと首を振るまで続くのだった。

箱に閉じ込め鍵をする

さて、朝食が終わってから、本丸の案内や消耗品の場所、扱い方等についての説明を加州や大和守から受けている間も、何故か黒い彼は鶴の後ろをついて回っていた。とくに口出しはしないで、説明を受けて覚えようと頷く鶴の様子を観察しながら。

説明や補足もする気が無く、ただただついて回るその黒い彼に、だんだんと加州は眉間にしわを寄せていく。

最後にもともと鶴が使わせてもらっていた部屋まで到着したところで、ちらりと鶴丸国永へ視線を向ける。

「んで、鶴丸はいつまでくっついて回るわけ？もう説明も済んだし定位置にでも戻ったら？」

「そう邪見にすんなって、ちよいとお嬢と話でもと思っただけだぜ？」

「僕らは一度、主のところに報告に行こうと思うけど、鶴丸さんは鶴さんという感じ？」

「そうだな、いいかいお嬢」

にやっと笑う彼に、鶴は了承する。

「なら、俺達は一度主に報告とかしてくるよ」

「そうだね、たぶん女性ってことで他の男士とは違うこともあると思うし」

「あ、あの…二人ともいろいろとありがとう…」

鶴が二人に感謝を告げれば、どこか照れたように気にしないでと告げ、二人は去って行った。

ひらひらと振られた手に合わせて、こちらも手を振ってからちらりと横を見上げる。

そこには、ん？とこちらを見降ろす金の目。

「えと、黒鶴はこれからにするの？」

「よければどうして？」そう、なっているのかを話し合いたいところが…」

うーんと腕を組んで首をひねる彼。

だが、まあ今度で良いかとおつづき、なあとおつづけた。

「お嬢は他の刀剣には会ったのか？」

その質問に、名前がわかるのと、わからない刀剣が何人かと答えた。まあ、知識としてもう臍気になってきているがゲームでの刀剣の名前はわかるが、実際にここであいさつできたのは片手で足りるくらいだ。

「…で、あとは。えと大俱利伽羅…？」

「へえ加羅坊とももう会ってたか。貞坊とはまだなら短刀達のところにも行くかい？」

「貞…？…短刀…」

確か、太鼓鐘貞宗…だった。

薬研とは違う伊達漢って感じの少年姿だったと思う。

そうかあ、この本丸にはいるのかあ…。「わたし」がやってた時は来てくれなかったな…

なんてことを一瞬考えたが、表情には出なかったらしい。

疲れていないなら行くか？と再度問われ、つい頷いてしまった。

彼はそれじゃ、こつちだと先導する黒い後ろ姿を見たとき、なぜだろう、ふいに手が伸びてしまつて彼の背中の布をつかんでいた。

くいつと引つ張るように後ろに引かれたその感触に、ん？と振り返る目は特に変な光は帯びていない。

「どうした、お嬢？」

「…え？…あ…」

黒い布地は自分の袖と同じ素材。

色だけが、ただそれだけが違う。

「…ごめん、なんでもない」

とくに理由はない。それは嘘じゃない。

でも、無意識に動いたことに首を傾げた。

何か、言いたいことがあつた。でも、自分から今言つていいことなのかわからなくなった。

そもそも何て言えば良いのかもわからない。

だからごまかす。左手に握られた自分（刀）の鞘を包み込むように両腕で抱きしめる。

何か言われるかと思つたが、黒鶴は何も語らずただ静かに頭をぽんぽんと叩いて、いくかと歩を進めた。

いずれ、聞けるだろうか。

なぜ、今の「わたし」がいるのか。

なぜ、彼は黒く染まつたままなのか。

なぜ、「わたし」を否定しないのか……。

前を行く彼を追いかけながら、その背を眺めながら、そんなふつつつと込み上げる疑問を心の箱に閉じ込める。

おそらく触れたら、触れてしまつたら戻れなくなるだろうと漠然と感じながら。

でも、いつか聞けるだろうか。

このたぐさんの「なぜ」を、そして……

なぜ、………わらつて（ないて）いるのかも。

短刀に会いに行く

長い廊下を進むにつれ、なにやら賑やかな声が聞こえてくる。

先に行く黒鶴が曲がり角で覗くように、廊下の先を見て歩を止めた。

それに合わせて私もひよいつとのぞき込むと、その先には広い庭と共に開け放たれた稽古場があるようだ。

「よつ、今日もにぎやかにやってるな」

黒鶴に隠れて誰かいるようだ。

「ああ、鶴丸殿。ちょうど良かった、少しお尋ねしたいことが…」

優しそうな男性の声だ。

黒鶴の後ろからもう少しのぞき込み、上から降ってくる声に視線を向けると、バチツ金の瞳と水色の派手な髪が揺れる彼と目が合ってしまった。

「……………(じー…)」

え、すぐ見られてる？なになに、視線が痛い、刺さってる…なんて思いながら目が離せなかった。

そこにいたのは栗田口の短刀達に兄と呼ばれる存在。

うわー…一期一振だ…こうやってみるとカラフルなんだなあ…

「あー…、もしかして尋ね人ってやつかい？」

にやつとしながら左肩に届かない自分とおそろいの白い髪を撫でつけてくる黒鶴に、やつと一期一振から視線を離して、なに？と頭を撫でられながら首を傾げるわたし。目が合った黒鶴はちらりとこちらを見てから一期一振に顔を向けた。

なんで頭撫でられたんだ…？

「つてことは、タイミングはばっちりって感じかね」

「ははっ、そういうことになりますな」

頷きながらこちらに笑顔を向ける一期一振は、さすがロイヤル王子様。イケメンである。

「驚かせてしまって申し訳ない。朝食の時に君を見かけて弟が声をかけたいと話していたので、まさかすぐに会えるとは思っていなかった

もので…私は粟田口の太刀で一期一振と申します」

「…わたしは鶴丸…えと…たぶん、弟さんに助けてもらったと思う…」

えーと、あの場にいたのは骨喰と平野だっけ?…たぶん居た気がする。

あ、乱ちゃんとも会ったな。可愛かった。

「…ありがとう?」

お兄ちゃんにお礼言うのも変なのかな。

とりあえず首を傾げながら一期一振に感謝を言ったら、なんか固まった。

「…っ」

「くっ…っふ」

片や黒鶴は笑いを隠しきれていない。

「…なんで笑うの」

「お嬢…これ、わかってないんだな…っく、あー楽しませてもらえて俺は嬉しい」

「??…馬鹿にされてる?」

「いやいや、まさか!…これからもそのままのお嬢で行ってくれ!」

くっくっ笑われて、でもそれで良いとか意味わからないこと言われた。

これ不機嫌になっても良いのかな。

「おや、そこにおけるのは鶴丸と…」

ゆったりとした声が一期一振の向こうから聞こえた。

視線を下げると縁側に座りこちらを見上げる美人…いや、男性なのに美人という言葉が似あう天下五剣が一振りがいた。装飾の無い戦装束を着ているからそこだけ時代が遡ったのかと錯覚してしまいうだ。

傍らにお茶菓子等が置いてあることから、お茶を飲みながらのんびりしていた模様。

「三日月…っ」

「いかにも、俺は三日月宗近という。そなたが例の…ふむ、こちらへ」

おいでと手招きされて黒鶴をちらりとみて——よくわからない、楽しんでるのかな、とりあえず笑っていた——から、三日月に近づいた。

座っている三日月の傍で膝をついたら、するりと頬を撫でられてびっくりと驚いてしまった。

「難儀なものだ…これは…」

三日月模様の浮かぶ瞳がこちらをのぞき込む。

痛ましそうに顔を顰め、親指で頬を撫でられた。

「…痛くはないか？」

「…??…いたくない、こまつてる」

ああ、飲み込まれそうだ。深淵を覗かれているようで、見透かされたような。

でも痛いって…なに、が？

「こまる、困るか…ははは、そうかそれはすまない」

ふっと笑い、頬に添えていた手で頭を撫でられ、さらに意味が分からなくなった。

「すまんな、気にするな。まだその時ではないのだろう、今はゆっくり休めばよい」

「う、うん？…そうする…」

絶賛疑問符を浮かべる私を気にせず、はははと笑う三日月。なにが、はははだ。

いや笑っていないで詳細プリーズ、なにかあるのか？

口を開こうとしたときに、「あー…」っていう漫画の吹き出しだったらコマの隅に追いやられそうな勢いのある大きな声が響いた。

左に広がる庭から聞こえたその声に、わずかに右に体が傾いだ気がする。いや、間違いなく。

声の主はその場にいた太刀達が振り向くと、短刀であり男の娘な可愛い美少女姿（やっぱり男の子）の乱藤四郎の真ん丸な青い瞳とぼつちり目が合った。

その瞳はきらきらした太陽の光を受けた海見たいな綺麗な色。

こちらはぱちぱちと瞬きをしている間に、なんだなんだと他の短刀や刀達が庭の向こうから、鍛錬場の中から、また近くの部屋から続々と顔をのぞかせてきた。

「ねえねえ！昨日僕と会ったの覚えてる？」

気づいたらちよつと先にいたはずの乱ちゃんが近くに来ていてびっくり。

さすが短刀：素早い。というかもう極めてるんじゃないかな、早すぎて忍者かと思った。

いや忍者なんて知り合いないし見たこともないから、漫画のイメージなんだけど、シユバツ！って感じで近づいてきたから。あ、でも忍者（くのいち）とかの恰好に会いそうだな。

漫画でくのいちだとNARUTOとかくらいしか思いつかなかった。枝の上をひよいひよい移動しているイメージだ。あ、でも短刀なら瓦屋根の上をひよいひよい移動してもおかしくないな。うん。

なんて馬鹿な事考えて、だんだん彼、彼？うん、女の子みたいだけど、その可愛い表情が少し曇っていく。

「昨日は大変だったから覚えてないかな…？」

「え、あ…覚えてる、玄関で会ったよね」

わたしと焦ったように声をあげた。いや泣かないよね？君のお兄ちゃんが後ろにいるから反応怖いわ。

覚えてるという言葉に、ぱつと花が咲くように笑顔になった乱ちゃん。

これ、女の子扱いで良いよね？うん、良い気がする。

「よかった、改めて、僕は乱藤四郎だよ」

「わたしは、鶴丸…です」

「つーちゃんって呼んで良い？鶴丸さんと被つちやうから。僕の話は乱で良いよ、藤四郎はいつぱいいるからね！」

「え、うん。えといいいよ、み、乱ちゃん？」

返事をしたら、感極まったかのようにぎゅーつと首に抱き着かれました。

…なぜ？

ああ、でもさすが男の娘、髪から香るふわっとした良いにおいがする。

まじか、女子力高い…。

「…大変だったよね、ここの本丸は大丈夫だからね！」

「……………あ、うん？」

…なにが??

大丈夫ってなに、なんかあったかな。

内心疑問が浮かぶ中での、適当な相槌にぎゅっと抱きしめる腕を強めた乱ちゃん。

ちよ、微妙に首締まってきた。それ以上はいけない。

彼の背中をぽんぽんと叩いて、腕の力を弱めてもらおうとしたら、なぜかほつぺたすりすりされました。

えええ…なんのご褒美ですか、すつべすべでめつちや気持ちいいというか、この身体も肌すべすべで、お互い気持ち良くて幸せしかないんですが、なんですか、極楽ですか? そうなんですか?

背中ぽんぽんするとご褒美もらえるとか聞いてない、嬉しい。

おちつけ、わたし…だめだ つるまる は こんらん している。

「乱、それくらいにして、俺っち達にも挨拶くらいさせてくれや」

少し低めの声に乱ちゃんの向こうを見ると、白衣をまとった少年や他にも何人か短刀達が集まってきた。

「うー…もうちよつとく、っーちゃん良いにおい〜」

「…そう?…乱ちゃんも良い香りがする…(あ、変態じゃないよ、違うよ)」

そうやってくすくす笑ったら、乱ちゃんが至近距離で目を合わせてうれしそうに笑ってくれた。

2人でそうして笑っていると、後ろから黒鶴がぼそりと

「……………さすがに、無防備すぎやしないか?」

とかなんとか呟いているが、可愛いは正義なのだ。

その光景が

「なあなあ、ほんとに女形なのか？」

ひよいつと視界に入るのは藍の髪と大きな金の丸い瞳。

「一応挨拶からだな！俺は太鼓鐘貞宗、よろしくな！」

元気の良い声に、黒鶴が「お、来たか」と一歩近づいてきた。

「鶴さんがこの時間にこっち来るの、珍しいな」

「なに、まずは知り合いを増やさんと、驚きが減ってしまいそうでな」

「…？ どういう意味だ？」

いや、気にするなと笑う黒鶴をよそに、するりと離れた乱ちゃんが白衣姿の短刀、薬研藤四郎に何か話している。

その姿をぼんやり見つめる。

不思議だな、画面の向こうに今自分がいるだなんて。

続々と集まってくる小さいのから大きいのまで、自分に注目が集まっているのは感じるのだが、なぜだろう。

ほんのりと胸の内側に熱がこもる。きゅつと締まる。

こんな和気あいあいとした光景は見たことが無いのに、なんでだろう。

——なんでこんなに、泣きたくなるんだろう。

嬉しいような、悲しいような、責めるような、懐かしいような。

綺麗な絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜてまだら模様になったかのような気持ち。

言い表せない多数の気持ちは、誰のだろうか…。

異変に最初に気づいたのは、黒鶴だった。

「お嬢、どうした？」

ぼんやりとした彼女を上からのぞき込むようにそつと声をかける。

その様子に気付くものもいれば、いまだ話し込む刀剣達もいた。

「…あのね」

「ん？」

「なんでだろう…胸が、変。ぐちゃぐちゃしてる…」みんなが…

言葉にできず、でも視線は目の前をみているような、遠いどこかを

眺めるように。

右手で胸元をぎゅうつとにぎって、どこか呆然とする鶴に、黒鶴は複雑そうに眉をひそめた。

行動を起こしたのは意外にも横に座っていた三日月だ。

いたわるようにやんわりと彼女の頭を撫で、そのまま目元を伏せさせるように大きな手で目元を覆う。

「よいよい…いまは何も分からずとも、いずれ分かる時が来る。それまで眠っていて良い」

「いいの？これ、だって…みんな」が騒いでるよ」

「まだ時ではない、いまは休んでおれ…いずれ、わかる 때가こよう」
「そう…そうだね、ごめん、ね、みんな…」

ぐらりと揺れ、そのまま三日月にもたれかかるように倒れた彼女は、静かに眠りにについていた。

三日月は胸元に頭を預けた彼女を、少しずらしてそのまま膝を枕に横にならせた。

「難儀なものだな…このように」からみつかれて「は、もう戻れぬだろうに」

ぽつりと呟く三日月は、月を映し出す瞳に愁いを浮かべてため息を吐いた。

「ねえ、三日月さん…つーちゃん、大丈夫なの…?」

様子を見ていた乱や薬研たちは、白い顔をして眠る鶴丸に配慮して声を小さくしたが、深い眠りに落ちたようで彼女は微動だにしない。

そんな様子に不安そうな刀剣達を見やりつつ、ちらりと黒い鶴丸を仰いだ。

普段は人の輪にあまり入らず、我関せずといった風貌の彼は、同じ刀剣である彼女を見下ろしながら小さく笑っていた。

「楽しそうだな？鶴よ…」

「ああ、楽しいな…これからもっと楽しくなるだろうよ」

どこか苦笑が混じるが、それでも「片鱗」を見せた彼女を愛おし気にみやり身を屈めた。

白いまろやかな頬を人撫でして、小さく喉で笑う。

「なあ？」鶴丸国永「…俺を参加させてもらいたかったぜ…」

「…悪趣味だな」

まったく頭が痛いと言いたげな三日月をよそに、ぷにぷにとほほをつつく黒い鶴丸。

彼らのいう言葉ははつきりとしたものではないので、意味が分からず聞いている者たちは首を傾げていた。